



# 「私たちならではの」の不登校支援と、学びの保障の基盤作り

岩手県大槌町 グラウエントウジャン、安田百合香、坂尾蒔日花、中村光哉

## 岩手県大槌町について



### 基礎情報

- ・人口：1万1千人程度
- ・最寄り：大槌駅（三陸鉄道）

### 魅力

- ・穏やかな気候（夏は熱すぎず、冬は雪も少ない）
- ・山と海の自然が豊か
- ・名物：磯ラーメン、新巻鮭



## 大槌町の教育

けやき共育：0歳から18歳までのすべての子どもたちに誰一人取り残さない学びの保障の実現を目指す、という大槌町の教育方針



## 私たちの取り組み

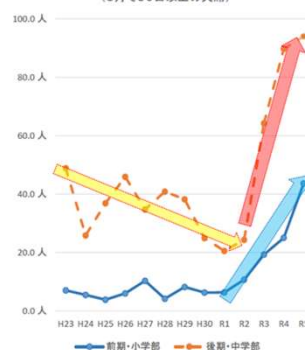
- 6-7月 事前調査  
出身校への聞き取り調査、文献調査  
自治体との打ち合わせ等
- 8月21-22日 現地訪問①  
訪問先：役場、小学校、NPO、教育支援センター
- 9月16-20日 現地訪問②  
訪問先：中学校、幼稚園、学童、市民センター、お寺、東大海洋研究所  
子ども食堂の参加、夏祭りの見学
- 10-11月 企画提案、準備
- 2月10-13日 現地訪問③  
・コラボスクール大槌臨学舎での座談会  
・つつみこども園での大学生体験  
・吉里吉里小学校での授業

## 地域の課題

### ①激増する不登校児童生徒

コロナ禍以降、不登校児童生徒出現率が急増。岩手県内でも高い数値。

1 大槌町不登校児童生徒出現率の推移（3月で30日以上欠席）



### ②大学へのアクセス

地域の大学進学率が低く、児童生徒保護者とも身近でない。

## 中学生との座談会



NPO法人カタリバが2011年から運営しているコラボ・スクール大槌臨学舎にて、大槌学園7～8年生（中学1～2年相当）の希望者15名程度に向けて座談会を行った。

大学生生活の紹介や参加生徒の学習や進路の悩みについての話し合いを通して、大学をもっと身近に感じてもらうことができた。

ある保護者の方からは「今日東大生の話が聞けるってすごく楽しみに行ったんだよ」との言葉があったと伺い、普段大学生と接する機会が少ない彼らにとって、少しでも将来を考える上での新しい視点をもつきっかけとなったのではないかと考えている。

## 学童での大学生体験

学童であるつつみこども園にて、小学校低学年とその保護者に向けて、大学生生活の紹介や授業の説明など、大学生の生活を体験できるような企画を行った。前半は事前に用意した資料をそれぞれが発表し、後半は事前に手作りした履修科目カードを活用して児童たちと小グループで交流を行った。

児童には大学に親しみをもってもらうことができ、「大学生は楽しい！」や、「レモンから電気を作れるって面白い」などポジティブな感想をいただいた。また、保護者からは東京の大学に通う人からしか聞けない意見を聞けたと評価していただいた。



## 小学校での授業



吉里吉里小学校4年生に向けて、「大学生と一緒に気持ちについて考えてみよう」と題する授業（1コマ45分）を実施した。

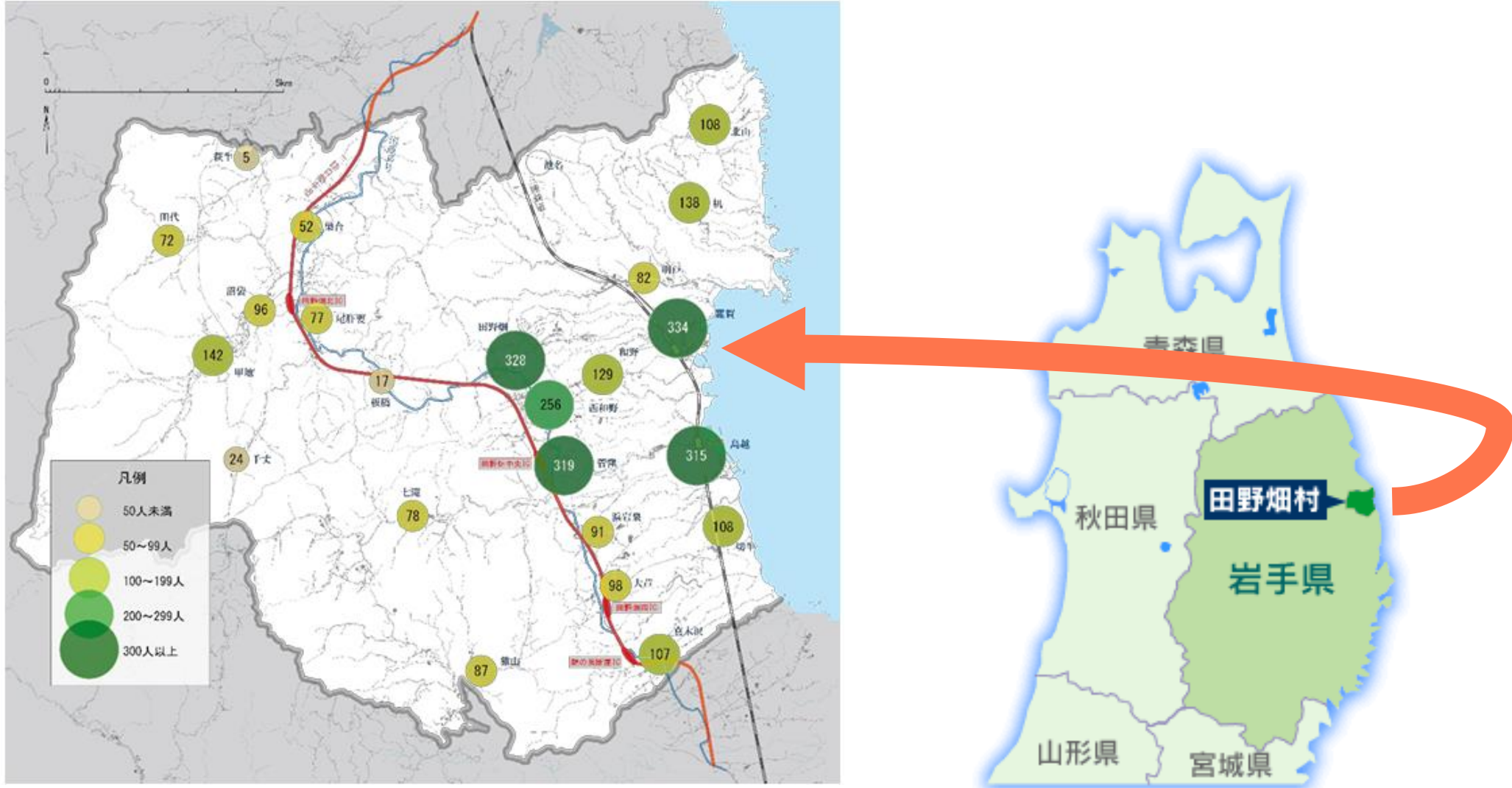
昨日一日の気持ちをグラフ形式で表し、友達同士で見比べることでそれぞれの共通点や違いを考えてもらった。当日は、4年生の生徒16名の参加に加え、釜石市の校長4名に見学に来ていただいた。

この授業を通して、生徒たちには同じ経験をしていても人によって感じ方が違うことを感じてもらった。また、見学に来た方からは「一人一人が生徒の目線で自然に接することができていた」と高評価をいただき、一方で「実施する環境によっては家庭環境が特別な児童もいるため、背景や日常を配慮してデザインすることも大事である」と今後に向けたフィードバックをいただいた。

## 01

### 田野畑村の概略

面積：東京23区のおよそ1/4  
人口：2,800人強（ピーク時には6,000人）  
世帯：1,300世帯強  
教育：小中1校ずつ



## 02

### 現地活動

【第1回現地活動】沼袋地区を中心とした世帯訪問  
【第2回現地活動】若年層・一次産業従事者にヒアリング

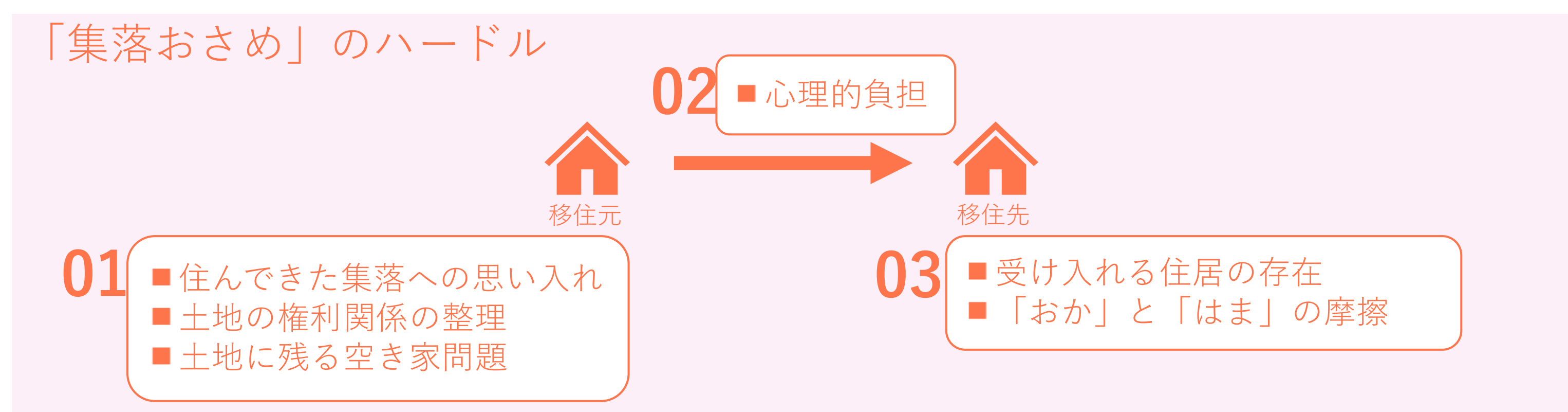
#### 住民の皆さんの声（一部抜粋）

- 現状、特別不満に思う不便はあまりない。
- 将来的に人が減ると寂しい。また自治会の負担増加が懸念。
- 神輿・お祭りなど集落の文化はできれば残したい。
- 近年、水産業の発展に陰りが見られる。漁協の旧弊も。
- 土地への執着は比較的薄く、子供には自由にしてほしい。
- 経済的な豊かさより、ここで住むことを選んでいる。

## 03

### 「集落おさめ」

「集落おさめ」：村の中に点在する各集落で、物理的な「孤立」が生じる前に、自分たちの手で誇りを持って集落を「仕舞う」こと。



## 04

### 「集落おさめ」のハードルの克服

- 移住元の集落への「思い入れ」に対するケア：「集落のターミナルケア」
  - 土地の将来のあり方に関する、住民主体の協議
  - 集落に関する映像・ドキュメントのデジタル保存
  - 集落の文化・お祭りのデジタル保存
  - 集落の歴史の整理
- 土地の権利関係の整理
  - 所有権を保持したままに、管理・処分権を村や公社に移転する「信託スキーム」の確立と周知。
  - 「土地バンク」の設立と、そこへの寄附のインセンティブ設計
- 土地に残る空き家問題
  - 活用…トレイルの簡易休憩所、研究の観測拠点として。
  - 解体…集落単位の一括発注によるコストダウンを実現しながら、自治体は建物解体のための積立基金を確立する。
- 心理的負担：移住のインセンティブ設計
  - 正のインセンティブ（アメ）…移住先地域の交通網の拡充
  - 負のインセンティブ（ムチ）…移住元地域の交通網の削減
- 受け入れる住居の存在
  - 現状3棟余っている村営住宅の利用条件の緩和
  - 中心部に見られる空き家のリノベーション
- 「おか」と「はま」の摩擦
  - 初めは数日間の「中心部お試し生活プロジェクト」というような、小規模な計画から始め、徐々に相互理解を図る。

## 05

### 村の将来像

- 孤立を回避するために中心部へ集住
  - 特に、車の使えない高齢者
  - 車の使える層には現状維持と移住の2択を迫ることになる。
- 中心部の利便性拡充
  - 診療所などが近くなる
  - コンビニ誘致に繋がる可能性もある
- 交流の場の拡充
  - 診療所やお寺を中心としたコミュニティカフェ
  - 学童の場を世代間交流の場にできる
- 非移住者のための最小限のインフラ経営
  - 酪農や漁業従事者を中心とした、居住区域を移しにくい一次産業従事者
- i. 山間部
  - 集落撤退後の土地を集約。新規参加者が活動しやすい環境を整備。
- ii. 沿岸部
  - 可能な限り、「外洋漁業」から「磯根漁業」へ
  - 「みちのく潮風トレイル」を活用。冬に岩手県のスキー場を訪れるインパウンド客を、夏のトレイル客へと誘導。
- 移住元の集落の文化保存の拠点
  - 集落の象徴的な木を移植するなど
  - 各集落にまつわる文献・映像の保存

# 山形県高畠町

～高畠高校の志願者数増加を目指して～

岡安敏輝 大村拓未 カクリクエイ 松田大郎

## 1. 高畠高校の概況



- 人口：約21000人
- 面積：180平方キロ
- 東京からのアクセス  
新幹線で片道2時間半



- 町内唯一の高校
- 特色：総合学科を有する  
→ユニークな科目・教科が多数
- 課題：定員割れの常態化  
→23年に定員削減(120人→80人)
- 対策：「高畠ゼミ」発足  
→3年次の総合的な探究の時間を利用

## 3. 課題

「広報タスクをこなす場」になってしまっている

志願者数減少の根本的な原因を理解していない

先生から言われた取り組みをこなすための活動  
ゼミ生の主体的な提案・運営が出来ていない

なぜなのか...

各関係者同士の連携不足が深刻

生徒	・活動の主体が高校3年生であり、受験との両立でそもそも負担が大きい ・単年活動でノウハウが蓄積されにくく、そもそもの問題意識を持ちづらい
先生	・授業や部活動などでもかなりの負担を抱えており、高校生が主体となって問題意識から提案を創り上げるような運営が難しい
行政	・高校生との結びつきが弱く、役場としてやりたいことがあっても高校生までおろして具体的な取り組みにしていけることが難しい
FS生	・先生方が想定するスケジュールの把握不足により、高校生が主体的な提案を考えていけるようなサポートができなかった

## 4. 展望

ゼミ生が主体的な提案をしていくために

- ① 下級生からのゼミ参加
- ② ゼミ活動の引き継ぎ資料の作成
- ③ 各部署の連携強化
- ④ ゼミの運営スケジュール決定へのFS生の参加
- ⑤ 先生の負担が大きくなる自立したゼミの運営

## 2. 一年間の活動





# 福島県相馬市



森田晃弘(3年)・成戸杜和(2年)・上敷領悠那(2年)

## Info



## 課題

### “空洞化が進む中心市街地の活性化”

商店の閉店や人口減少、災害の影響で空洞化が進む中心市街地について、その状況を実際に見て、意見交換を行う

## 第一回



## 第二回

高校生プロジェクトについてのご意見をお願いします！



チーム東大

全面的に賛成だが、「既存のお店の存続」問題への即効性のある解決方法の方を先に考えてほしい、、、



商工会

概ね賛成！高校生に相馬市の歴史を伝えていきたい



羽根田万通 (老舗菓子店オーナー)

賛成です！長期的な視点を持って街づくりに組み込みたい



只野敬三 (市議会議員)

賛成です！長期的な取り組みにしたい



波多野広文 (市議会議員)

## 提案

### 駐車場の設置と周知

- 商店街にわかりやすい無料駐車場をつくる！
  - 観光客などにとって、駐車場があることで商店街の店の利用のハードルが下がる！
  - 車社会となっている相馬市において、外部からくる観光客もその多くは
- 浜の駅、市のホームページといった観光客から見える場所に地図を掲示する
  - 外部の人にもわかりやすい表示が重要

### 高校生向けの空きスペース活用

- 中心市街地の滞留時間を伸ばすアイデア
  - 空き店舗に高校生の滞留場所
  - 総合学習の時間や自習の時間に使える場所
- でも維持は誰がやる？
  - 大事なのは誰が運営しているか、どうコミュニティを盛り上げるか
  - 高校生が自主性を持って運営する必要がある

### スタンプラリーの実施

- 商店街のお店をめぐるスタンプラリーの実施
- 新たに作るルート
  - 例) スタート：駅 ゴール：相馬中村城
- サイクリングコースに組み込むルート
  - 既存の「松川浦サイクリングコース」に追加で加える

### 高校生とのワークショップの実施

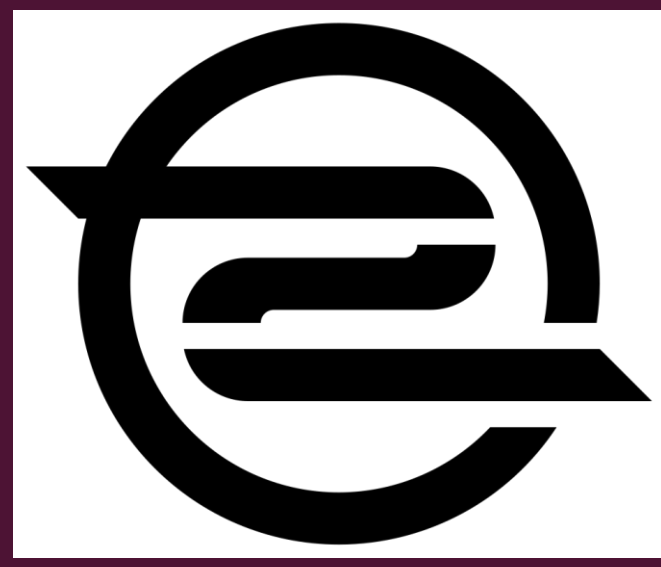
- ① 魅力発掘リサーチ
- ② 多角的な情報発信
  - SNSによる発信
  - 地域の情報誌の作成
- ③ 継続的なコミュニティづくり

フェーズ	時期	活動内容(メイン)	継続のための仕掛け(パッケージ化)
1. 始動・勧誘期	4月-5月	新メンバー募集、オリエンテーション、キックオフ	「部活動化」：運営マニュアル(学年の定章・連絡先リスト)の配布。
2. 育成・調査期	6月-7月	取材スキルトレーニング、商店街リサーチ	「パチャ製」：上級生(経験者)が下級生に取材・撮影を教える。
3. 実践・制作期	8月-11月	夏の集中ワークショップ、情報誌制作、SNS発信	「テンプレート活用」：制作物のフォーマットを固定し、誰でも作れるようにする。
4. 共同運営期	12月-1月	次期リーダー選定、活動の数値化(PV数や配布数)	「次世代の巻き込み」：次期リーダーが企画の主導権を握り始める。
5. 引き継ぎ期	2月-3月	成果報告会兼引き継ぎ式、次年度予算・計画策定	「引継ぎパック」：取材先リスト、パスワード類、SNS運用ルールを更新・譲渡。

### フリーマーケットの実施

- 商店街の空き店舗にてフリーマーケットを実施する
- 空き店舗活用だけでなく、住民同士の交流や住民が商店街に行くキッカケとしても期待できる
- スタンプカードなども作成し、商店街のお店の割引チケットなどを特典にする
- 地元の高校生たちをアルバイトとして雇うなど高校生にも協力してもらうのも良いかも





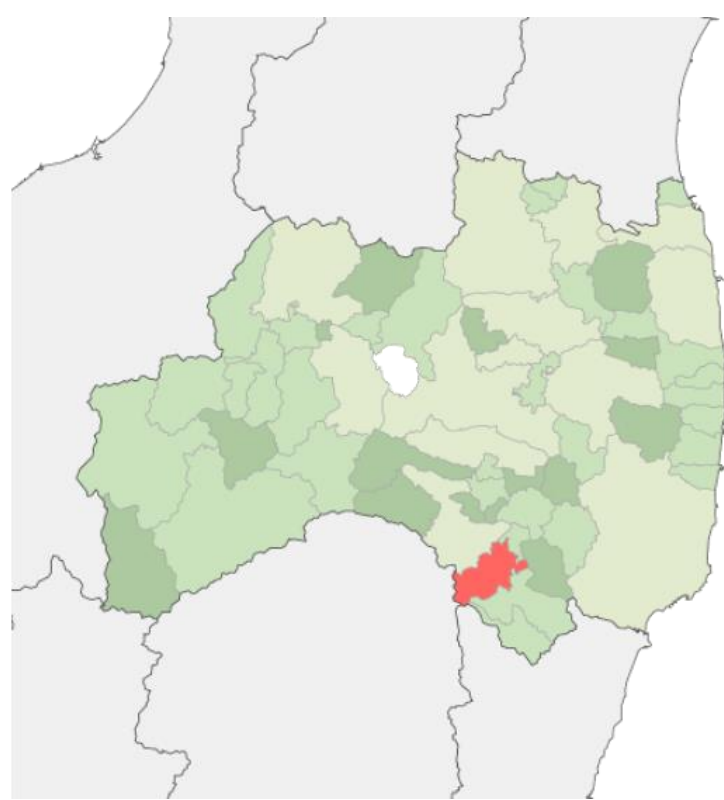
# 豊かな観光資源を活かしたにぎわい創出

## 棚倉町の紹介

- 人口12,649人（令和7年）
- 都心から東北新幹線・JRバスで約2時間30分
- 江戸時代は棚倉藩の城下町として繁栄

(参考) 昨年度の活動

- 観光スポットの洗い出し
- サイリングコースの設定
- 観光発信の強化



▲棚倉町の位置

## ミッション

- 1.持続可能な観光
- 2.町民が育て、多様な交流が生まれる観光
- 3.新時代に対応した観光

- 昨年度の提案のブラッシュアップ
- 観光コンテンツの洗い出しと整理
- 既存観光資源のブラッシュアップの方法や展開
- 観光拠点施設のコンセプトについて

## 活動内容

~8月：事前調査

9月：現地活動

11月：現地活動

12~2月：提案作成

3月；  
学内/現地報告会

### 第1回現地調査

- 町内の観光地や飲食店の周遊
- サイクリング体験
- 町長訪問



▲山本不動尊

### 第2回現地調査

- 関係者への聞き取り調査
- スタンプラリー体験
- 追加の観光地や飲食店の周遊



▲棚倉町活性化・観光物産協会

## 棚倉町の魅力

- 歴史的な情緒
- 桜/紅葉
- 素朴な風景
- サイクリングロード



▲八槻都々古別神社



▲奥久慈街道

## 課題

- 体験できるアクティビティの不足
- 棚倉町・観光資源の認知不足

➡ 「体験」 + 「PR」 で魅力を活かした観光へ

## 提案

### ① レンタサイクル事業の改善

- 1.常設的企画の提案
- 2.サイクリングを目的とした観光
- 3.地域内での利用促進

### ② 観光拠点施設のコンセプト

観光情報・歴史紹介に加えて  
体験アクティビティの併設

### ③ 観光促進PR

Instagramをリール動画主体に  
ホームページも写真主体に

「手段」から「アクティビティ」へ

「読み取る」から「参加する」へ

文字情報から視認性向上へ

# 地域資源カード制作プロジェクト

東京都新島村チーム：山口、谷口、横田、和泉



## 新島村の現状と課題

人口：新島 1871人 式根島 451人 (令和8年3月1日時点)  
 高齢化率：35.1% (令和2年3月30日時点)  
 面積：新島 23.64km<sup>2</sup> 式根島 3.88km<sup>2</sup>  
 主要産業：観光サービス業、漁業、農業、コーガ石事業

### 「議論がまとまらない」という壁

新島村の未来を考える会議において、地域資源が体系的に整理されていないため、議論が発散しやすく、具体的な合意形成に至らないという課題。

## 解決策：カードによる可視化、議論のプラットフォーム構築

### 地域資源の可視化

漠然とした「新島の地域資源」をカードという形に落とし込み、参加者全員が同じ情報を見ながら議論できるようになる。

### 議論のプラットフォーム構築

地域資源カードを用いた議論のプラットフォームを整えることで、新島の未来に向けた議論を円滑に行えるようにする。

## Phase 3: カードの試作 (プロトタイプ)

### 議論を生むデザインへ

#### 要素の抽出

カードに載せるべき要素についてチームで議論し、取捨選択を行った。

#### ラフデザイン

他の自治体の例などを参考にデザインをいくつか試作。

#### 資源の詳細な調査

メンバー各自で資源についての詳細な情報を収集。それをカードに落とし込んで50枚ほどのカードを制作。



## Phase 5: 完成版作成

### フィードバックを受けての再制作

第2回調査でのフィードバックを基に、議論効率化に有効なカードのあり方について議論。

#### デザインの簡素化

議論に必要な情報に絞る。

#### 議論の蓄積

背面のQRコードで意見を送信できるようにする予定。

#### 量産

自治体の方々の資源選定をもとに、84枚のカードを製作。



## 完成版 (表版)

### 7つのジャンル

- ・食
- ・文化
- ・自然
- ・施設
- ・産業
- ・観光
- ・交通



## 完成版 (裏版)



裏面のQRコードからフォームへ。資源ごとに思いついたアイデアや課題を送信できる。議論が発言し損ねた人にも機会を。



## 活動以前

## Phase 1: 事前調査 (資源の下調べ)

### オンラインリサーチ:

歴史、文化、交通、施設、観光、自然環境、食、産業など、幅広いジャンルをインターネット等で下調べ。

▶ 島にまだ訪れたことのない「よそ者」の視点を大事にしつつ、以下の観点で地域の資源を調査した。

- ・島のことを何も知らない状態での率直な印象や分析を書き留める。
- ・資源のみならず、調べていく途中で感じた島の課題や疑問も書き留める。

資源の名前と不満足	概要	魅力ポイント	懸念点
1 新島山	新島山の麓で、西暦エリアを一歩でできる	比較的アクセスよく、道からの景色を楽しむことができる	多すぎた
2 新島山展望台	夕あけの眺め、満月「夜明け」、夕焼けになると人々が集まる	海にセットで撮影すると綺麗	実用性
3 新島山展望台	夕日を見るにぴったりの新島山展望台にあるスポット	アクセスがよく、海に近づくことができる	海での
4 新島山展望台	新島の歴史や文化について学ぶことができる情報	内容は観光客向けで、新島について学ぶには良いスポットではないか	特になし
5 新島山展望台	約7kmの白砂が美しい新島山展望台	長く美しい海岸線を一望でき、星空も綺麗	新島山
6 新島山展望台	真っ白なメーンゲートと展望、新島山展望台の海が個性	新島で撮影するに最適な場所、新島山展望台の海が個性	新島山
7 新島山展望台	展望台の展望が、新島山の眺望を堪能できる	展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山
8 新島山展望台	キャンプ場やサイクリングロードが整備されている公園	24時間開放、古代ギリシャ風の珍しい建築の露天風呂を楽しめる	新島山
9 新島山展望台	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山
10 新島山展望台	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山
11 新島山展望台	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山
12 新島山展望台	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山
13 新島山展望台	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山
14 新島山展望台	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山
15 新島山展望台	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山
16 新島山展望台	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山
17 新島山展望台	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山
18 新島山展望台	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山
19 新島山展望台	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山
20 新島山展望台	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山
21 新島山展望台	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山
22 新島山展望台	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山
23 新島山展望台	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山
24 新島山展望台	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山
25 新島山展望台	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山
26 新島山展望台	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山
27 新島山展望台	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山
28 新島山展望台	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山
29 新島山展望台	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山
30 新島山展望台	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山展望台の眺望が、新島山の眺望を堪能できる	新島山

## Phase 2: 第1回 現地調査

### 体験と対話による解像度の向上

#### ① 資源の体験

事前調査でリストアップした場所を島の方々にご案内いただき、五感を使ってその資源を体感した。  
 ▶ 随時、事前調査と実際の様子のギャップを書き留めながら、島をまわった。



#### ② 住民ワークショップ

地元の方々とワークショップを開催。実際に即席で地域資源カードを制作し、それぞれが好きな地域資源について発表。  
 ▶ 議論に使いやすい地域資源カードの形態について、ワークショップのデモを経て議論。



## Phase 6: 現地報告会

### ① 84枚のカードを並べての展示会

新島港の展示スペースに島民の方々が来訪。パンフレットの配布や、カード・プロジェクトについての説明を行った。



### ② 完成版カードを使ったワークショップ

各参加者が島にとって特に大事だと考える島の資源を共有し、どう活かすことができるかを話し合った。



## 今後の活用可能性

### ① 議論のツールとして

- ・村の将来を話し合うワークショップで活用。
- ▶ ワークショップの形式についていつもの提案がされている。
- ▶ 今後は意見を収集するためのプラットフォームの考案が必要
- ・村役場で議論に活用。

### ② 観光のツールとして

- ・観光客向けに新島港で展示。

### ③ 教育のツールとして

- ・学校で地域学習に活用。

## カードの完成はゴールではなく新たな「対話と発見のインフラ」のスタート

「カード」という物理的な成果物を作って終わりではなく、それが新島における対話・観光・教育の新しいインフラとして活用できる土台を構築できた。

- ① 島民・行政向け : 未来を創る「議論のツール」
- ② 観光客向け : 自ら魅力となる「観光のツール」
- ③ 島の子供たち向け : 価値を再発見する「教育のツール」

## Phase 4: 第2回 現地調査

### 試作カードを使った実証実験

作成したプロトタイプカードを用いて、実際に住民の方々とゲーム形式のワークショップを実施した。



### 現地調査で得た成果

#### ① 議論は活発になったか?

活発化した。  
カードによって議論における要素が可視化された。

#### ② カードの情報は役に立ったか?

情報自体はそれほど役立たなかった。  
議論中にじっくりとカードを読むことは稀だった。

#### ③ これからの課題は?

ワークショップ内容の作成やカードデザインの再考、議論内容をどうストックしていくか。

## 氷見市速川地区のコミュニティの再構築と 稼げるまちづくりの実現に向けて

### 【メンバー】

- 山本 博健 (法学部第1類4年)
- 戸塚 愛理 (経済学部経営学科4年)
- 麻生 晃成 (工学部建築学科2年)
- 高山 恵里 (教養学部文科1類1年)

### Theme

速川地区まちづくり協議会・農村RMO...  
などの元々の取り組み

進める中で浮き彫りになった課題として...

- ・若い世代の地区行事への参加が少ない  
(= コミュニティが構築できていない)
- ・特産物等の地域資源を有効活用できていない  
(= 稼げる仕組みがない)

### Goal

- ① 速川地区のコミュニティの再構築
- ② 稼げるまちづくり

の2つに繋がる提案を出すこと。

### Vision

「ヨソモノ・ワカモノ目線」から見た学生の  
自由な発想を具体化して地域に落とし込み、  
農村RMOの実証実験の中に成果を組み  
込んでいく。

### 速川地区活性化への取り組み

- ① ひみ里山マルシェ
- ② 獅子舞

他取組との比較の結果、マルシェに注目  
● 「**コミュニティの再構築**」の視点  
若い世代が中心、老若男女が参加できる  
● 「**稼げるまちづくり**」の視点  
RMO(農村型地域運営組織・R7年度まで)の予算  
がなくても自走できる可能性高い

### 未来への取り組み

- ③ 本音アンケート

## 提案① ひみ里山マルシェ - 2026.5.3 at 速川公民館

### これまでのマルシェ

廃校舎の体育館を活用し様々な地域  
特産品を販売。これまでに2回開催。

- ・ 1年目 (2024年)  
メダカの販売が中心。  
約1500人が来場。
- ・ 2年目 (2025年)  
椎茸の原木に菌を入れる体験企画が  
中心。市民楽団のコンサートも。

### 次回に向けた課題

- ・ 予算  
RMO予算がなくなるため、人件費  
削減の上で、稼ぐ必要がある。
- ・ 地域コミュニティ  
マルシェの運営に携わっているのは  
一部の住民のみ。地域コミュニティ  
強化のためにも、まずはマルシェに  
来てもらうことが必要。



- ・ 現実的な集客目標作成
- ・ ビラ・ポスターでの広報  
スーパー・氷見線各駅など
- ・ 協賛企業策定
- ・ 体験の創出  
小中学生向けのVR体験やスポーツ対戦

- ・ 収支計画の策定  
業務を整理して、**ボランティア前提**に。  
将来的には**収益から人件費を支払う**。
- ・ **プリンス焼きブース (東大生)**  
速川地区のさつまいも等を活用して、**プリンス**(特産の鱒をモチーフにしたキャラクター)の型を使った今川焼きを販売

▶ 昨年のマルシェ

▶ 議論の様子

▶ 十二月に提案した  
提言内容

収支計画 (過去)

収入の部	令和6年度	令和7年度
出店料	49,000	67,500
千本くじ	27,700	15,600
自主事業イベント	80,000	
収入合計	156,700	83,100

支出の部	令和6年度	令和7年度
寄付金(衆議金)	70,000	118,981
備品購入費	61,666	157,580
人件費	549,750	749,250
賞状費	14,957	45,586
RMO補助金	578,828	932,706
合計	696,373	1,071,397

収支計画 (次年度)

収入の部	単価	数量	合計
出店料(物販、体験)	1,500	43	64,500
出店料(飲食)	2,000	7	14,000
電気料	500	6	3,000
千本くじ(飲食)	200	75	15,000
プリンス焼	300	200	60,000
合計			156,500

支出の部	単価	数量	合計
石炭	3,300	1	3,300
千本くじ(レンタル費用)	2,750	1	2,750
材料費(プリンス焼)	120	200	24,000
チラシ印刷代	4	5,000	20,000
投票箱	20,000	1	20,000
備品代	10,000	1	10,000
人件費(原資代)	1,000	24	24,000
合計			104,050

→利益の52,450円を来年度に繰越し予定

## 提案② 獅子舞とワカモノ

背景  
地域の中学生の声を元に...  
「**コミュニティの再構築**」に向けて

※実際にインタビューの機会をいただきました

獅子舞の可能性  
・ 獅子舞が、中高生の学校外での  
交流の場になっている  
・ 獅子舞が地元の誇りになる  
→ 速川への**帰属意識**の向上  
観光資源にもなりうる

さらに発展  
・ **中高生**が集まれる場を増やす  
→ **空き家**の活用



## 提案③ 速川地区の「現実的な将来」を考えるためのアンケート

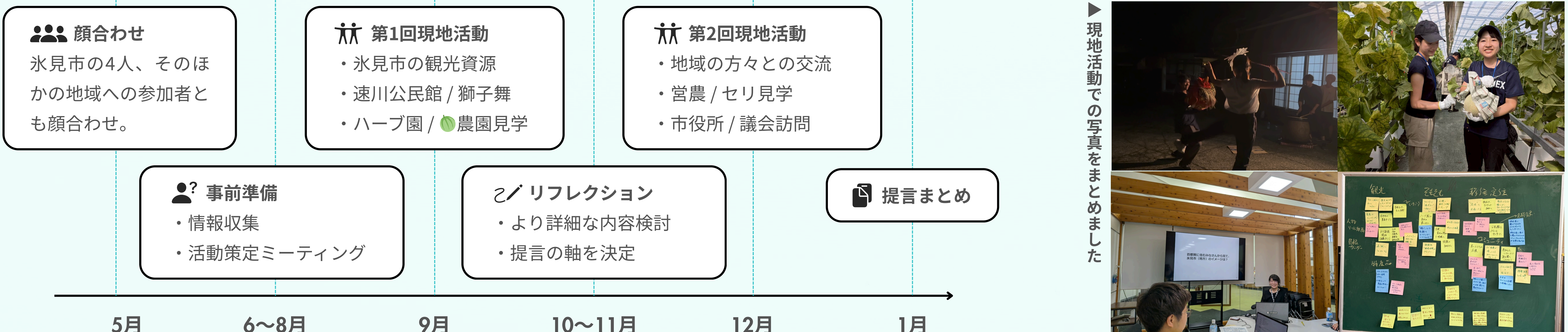
背景  
・ 高齢化  
→ 今いる人の子供世代は...?  
・ 移住・観光促進を目指している  
→ どの規模を目指すのか...?

目的  
・ 地区の**全員の**本音を把握する  
→ 行事に積極的に関わっていない人  
転出した人も含む  
・ 地区の将来を考える機会にする  
→ アンケートを機に話し合う  
・ “現実的”な目標を明確にする

対象  
・ 速川地区に住む人  
・ 地区を離れている家族  
ポイント  
★無記名も可能  
★全住民(×世帯ごと)  
★まずは身近なところから

内容  
・ 年代・性別  
・ 速川地区との関係  
・ 地区の将来をどうしたいか  
・ 理想の将来のために何が必要か/  
何をするとつもりか  
・ 課題は何だと考えているか  
・ (地区外の人へ) 速川に戻って  
くる予定はあるか

期待すること  
アンケートの結果から  
① 将来の人口予測  
② 地区の行事へのニーズ/熱意  
③ 地区の現実的な将来  
を知る  
→ 地区の皆さんを巻き込んで  
“**現実的**”な将来を考える機会に!



# 富山県細入地区：空き家を活用した移住・定住促進

東京大学FS富山県富山市チーム  
奈木 麻里亜、天野 咲千、松下 宗平、鈴木 裕太



## 細入の現状と魅力

人口：1085人  
世帯数：487 世帯  
高齢化率：46.8%



富山県神通川の上流、  
富山県の最南部に位置する  
岐阜県に接し、南北約15kmに  
わたる渓谷と山々に囲まれた  
中山間地域



## 地域に内在する課題

**情報の分散**：移住支援制度や地域の魅力に関する情報が散在しており、ターゲット層に届いていない

**空き家の実情**：管理はされているが、すぐに住める状態ではない**空き家が多数存在**する

**心理的障壁**：空き家所有者が近隣住民に遠慮し、清掃や管理の協力を求めにくいという**地域内部の課題**

**担い手不足**：地域産業の担い手の方がいない

## 現地活動内容

### 第1回現地活動 8/30~8/31

観光スポットや空き家の見学、ボート試乗、BBQでの住民交流を実施し、空き家問題の厳しい現実と対話の重要性を学んだ



### 第2回現地活動 11/1~3

住民と半日かけて空き家の協働清掃を実施。また、細入まつりにブースを出展し、いいところマップ作成やキャッチコピー投票を行い、地域のリアルな声を収集した

### 第3回現地活動 3/1~2

1年間の集大成として地域住民や行政に向けて最終報告会を実施



## 移住・定住促進に向けた4つの提案

### 提案① 移住希望者へのアプローチ

「神通峡すまいる」の改修：**ターゲット**を**明確に設定**し、子育て・移住支援制度（金額など）を一元化して発信。**移住相談窓口**も明記する

**暮らし型ワーケーションの提供**：「市街地への近さ×自然」を活かし、**一時保育と連携**。仕事と子育てが両立できる**ワーケーション環境**（短期～長期）を整備し、移住への心理的ハードルを下げる

### 提案② 空き家所有者へのアプローチ

**情報提供の促進**：他市の成功事例を参考に、チラシを配布し、市外の所有者へ**空き家バンクへの登録を促す**

**自治会主体の協働整備**：自治会主体で住める状態への復旧を目指す協働整備日を設け、自治会が代行して広域発信力のある**空き家情報バンクへ登録する仕組み**を作る

### 提案③ 担い手確保の制度改革

**地域おこし協力隊のチーム制導入**：孤立を防ぐため、農業・観光・DX等の役割を分担した**チーム制**で採用する  
**特定地域づくり事業協同組合**：複数事業者の仕事を組み合わせ、**繁閑差を解消した通年の安定雇用を創出**する

## 活動が生み出したインパクト

**空き家のモデルケース化が始動**：協働清掃をきっかけに、個人で購入してでも整備を進めたいという住民の声が上がり、実際に1軒の**空き家のモデルケース化**に向けた具体的な話が進んでいる

**新たな人材の巻き込み**：活動を通して関与する住民の輪が広がり、最近移住した方が地域おこしに深く協力するきっかけにも繋がった

## 感想・学び

地方活性化の困難を実感する一方、次世代へつなぐ人々に希望を感じ、各地の固有の魅力を学んだ（奈木）

地域の方々と直接会って話を聞いたり、自分の目で課題を調査することの重要性を学んだ。（天野）

私達のようなよそ者でも、地域が前へ進む良いきっかけになる、と実感した。（松下）

外部との協力によって、課題を俯瞰的に見つめることの重要性を感じた。（鈴木）

# F5石川県珠洲市チーム最終報告

教養学部4年 廣田彩咲  
文学部3年 鈴木律紡  
文科一類2年 宇城謙人

## 珠洲市の概要

人口：10,420人（令和8年1月1日時点）  
高齢化率：53.3%（令和8年1月1日時点）  
高校：1つ（飯田高校）  
祭り：40以上（令和4年時点）



## 現地活動の方針設定

「子どもたちが思い描く『珠洲のみらい』を表現しよう」

→大人と子供の間にいる「高校生」に注目することに。

事前資料：高校生を対象にしたアンケート、「量的」なもの。

課題感：高校生の「生の声」が見落とされているのではないか。

→数的に声を集めるのではなく、声をそのまま捉え、表現することに

## 第1回現地活動

- ・事前に募集した高校生へのヒアリングを実施
- ・高校生の課外活動「ゆめかな」に参加
- ・大人がいることで子どもが自由に話すことができなくなるのでは？という気付き

## 第2回現地活動

- ・飯田高校の部活動に参加、友人同士の気さくな会話に混ざる
  - ・ヒアリングではなく「会話」に「混ざる」ことを意識した
- ・図書館に高校生を集め、より深い会話の機会を設けた

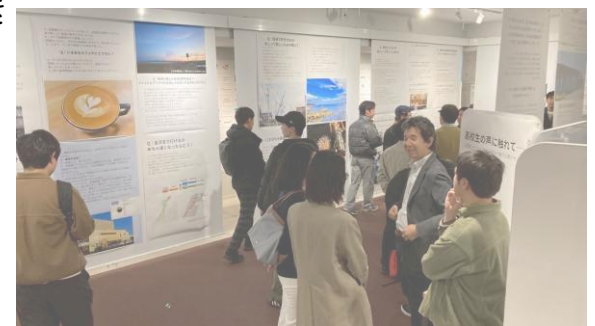
## 東京での活動

SHIBUYA QWSにて展覧会を実施（1月17、18日）

資料展示、動画作品のほかに、珠洲市出身の3名とのトークセッション

72名の方のご来場、2時間以上滞在する方が多く、来場者の交流の「ハブ」になれた

\*課外の活動で石川県人祭などのイベントに参加。チームで活動外の人脈を構築できていた



## これから

- ・見えてきた高校生の問題意識
  - ・勉強に集中できる場所（家以外の勉強場所）
  - ・移動の足 友達との遊び

複雑に絡みあいながらも、思い思いに過ごせる場所が欲しいのでは？

- ・だが、「おじいおばあがいる中で・・・」という高校生の思い
  - 高校生が声を上げてもうまくもならないという無力感があるのでは？

自分たちの意見を伝えることに自信を持ってない現状  
災害からの復興や高齢者支援などが優先されるべきという考え

- ・大学生の可能性

珠洲の高校生の思いに接近し、その思いを大人よりも聞き取りやすい存在。

（前述した大人に話しづらい思いなどを話すことのできる存在になれるのではないか）

既存の高校生—教育、高校生—行政といった構図から外れて、地域外から関わることのできる存在。

飯田高校との連携



### 石川県能美市について

**位置：**石川県南部・加賀平野の中央付近。  
 白山・日本海・手取川などの豊かな自然に恵まれている。  
**市制：**2005年2月1日、根上町・寺井町・辰口町が合併して能美市が誕生。  
**面積：**84.14km<sup>2</sup>（山林約42%/農地約22%/宅地約15%）  
**人口：**49,706人・20,718世帯  
**産業集積：**製造業や物流拠点が立地

### 今回のテーマ「デジタル公民館の魅力発信」

現状：移動難民対策として公民館にWi-Fiを完備し、遠隔診療やスマホ練習会などを実施しているデジタル公民館をあらゆる世代・属性の市民にとってさらに魅力的な場所とするため、株式会社CNC主導の「コミュニティサポーター」と協力して**公民館活用のアイデアを出し、実践し、分かりやすく市民に発信する。**

### 現地活動内容

#### ①学習支援ワークショップ



- ◆ 中高生を対象とした学習支援
- ✓ Zoomでの質問対応の実証
- ✓ 遠隔対応の難しさを知った

#### ②SFプロトタイピングイベント



- ◆ 子供たちと地域の未来を想像
- ✓ AIを通じた多世代交流の場
- ✓ AI×公民館の可能性を得た

#### ③国際交流会



- ◆ 日本人・外国人住民で文化交流
- ✓ ベトナム料理や歓談で交流
- ✓ 多文化共生拠点としての公民館

#### ③まちづくり部・町会間PF/HP



**現状** 地域活動運営が属人的  
 市民力の将来性に懸念  
 地域参画における分断

**目的** 地域参画の障壁低下  
 ノウハウの蓄積・共有  
 将来住民に町への関心を育んでもらう

**アプローチ** まちづくりWS実施・町会HP雛形の配布/PFへ発展

#### ④最終報告 まなびフェスタ2026



市長向け発表+市民向け発表→AIを用いてデジタル公民館の未来について考えるワークショップを開催。  
 「人工知能(AI)と作る！～未来の能美絵本会議～」  
 協力:東京大学大学院情報学環・学際情報学府 渡邊英徳研究室

#### ◎循環モデル



### まとめ（メモ：わかったこととデジタル公民館の展望）

今回：体験の拡充・発展可能性の提示  
 →AI等のテクノロジーに子どもたちが触れる/国際交流WSが「面白い」「実現できる」ことを示した

今後：さらにイベントが活性化  
 +情報発信やコミュニティの基盤強化によって、循環・発展していく→スマートインクルーシブ

制度/個人の熱意だけではない  
 自治体×CNCなど地域活動の支援制度のもと、意思を形にするコミッターと地域住民によって実現する

# これからの情報化社会へ

一紀北町におけるデジタルデバイド解消と電子申請普及に向けて

三重県紀北町チーム 木戸、吉川、大河、山田

## 課題：高齢化地域におけるデジタルデバイド解消とDX推進支援

### 0. 紀北町とは

- 人口 13,675人(2026/01/01)
  - 令和27年には半減するかも
- 面積の9割が森
- 年間雨量4000mm以上
- 自然が豊か
  - 世界遺産「熊野古道」
  - 奇跡の川「銚子川」
- マンボウ、渡利かきが有名
- きぼく燈籠祭



### 1. 活動報告

#### ○紀北町の魅力を知る

- 都内の紀北町主催のイベント参加
  - 6月、10月開催の紀北町PRイベント
- 紀北町内の見学
  - 熊野古道、銚子川
  - 芋掘りイベント
  - カヤック体験
  - 町内散策



オンライン申請に関するアンケート スマホからはこちら  
東京大学フィールドスタディ政策協働プログラム三重県紀北町チーム一報

オンライン申請に関する現状を把握するため、アンケートへの協力をお願いいたします。当てはまるものに○をつけてください。

あなたご自身についてお聞かせください。

問1. あなたの年代をお聞かせください。  
(1) 10代以下 (2) 20代～30代 (3) 40代～50代 (4) 60代～70代 (5) 80代以上

デジタル機器のご利用についてお聞かせください。

問2. あなたがご持ちの機器を全てお選びください。(あてはまるものを全てに○)  
(1) スマートフォン (2) パソコン (3) タブレット (iPadなど)  
(4) 上記のいずれも持っていない

問3. 普段、スマートフォンをどのような用途で利用していますか。(あてはまるものを全てに○)  
(1) 電話 (2) メール、LINEなどのメッセージのやり取り  
(3) インターネットでの検索 (ニュース、天気、お店探しなど)  
(4) SNS (X(旧Twitter)、Instagram、Facebookなど) の閲覧・投稿 (5) ネット通販  
(6) ゲーム (7) 写真・動画の撮影 (8) その他 ( )  
(9) スマートフォンは利用していない

問4. これまでに、紀北町などが開催するスマートフォン教室に参加したことはありますか。  
(1) ある (2) ない

オンライン (電子) 申請についてお聞かせください。

問5. 役所での手続きなどに、オンライン申請が利用できていることを知っていましたか。  
(1) 知っていた (2) 知らなかった

問6. (問5で(1)とお答えの方へ) 何を通じて知りましたか。(あてはまるものを全てに○)  
(1) 家族・親戚 (2) 友人・知人・同僚 (3) テレビ・新聞・雑誌  
(4) インターネットのニュース・広告 (5) 役所の広報誌やウェブサイト  
(6) その他 ( )

問7. これまでにオンライン (電子) 申請を利用したことがありますか。  
(1) 利用したことがある → 【A】の質問へお進みください。  
(2) 利用したことはない → 【B】の質問へお進みください。

#### ○調査活動

- 高齢者の方へ聞き取り
- アンケート調査
- スマホ相談会
- 職員の方への聞き取り



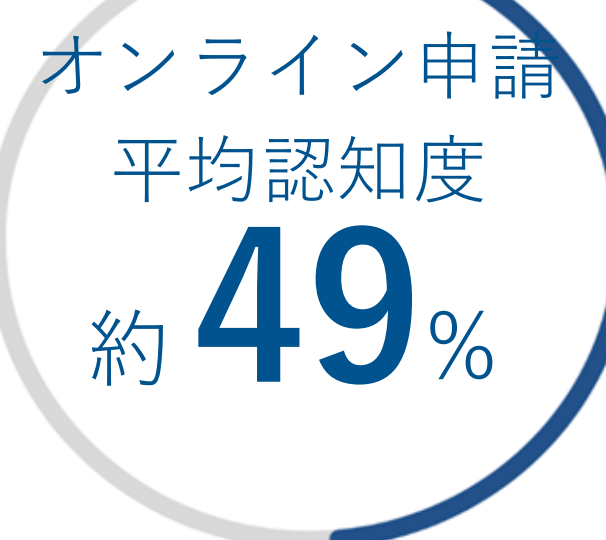
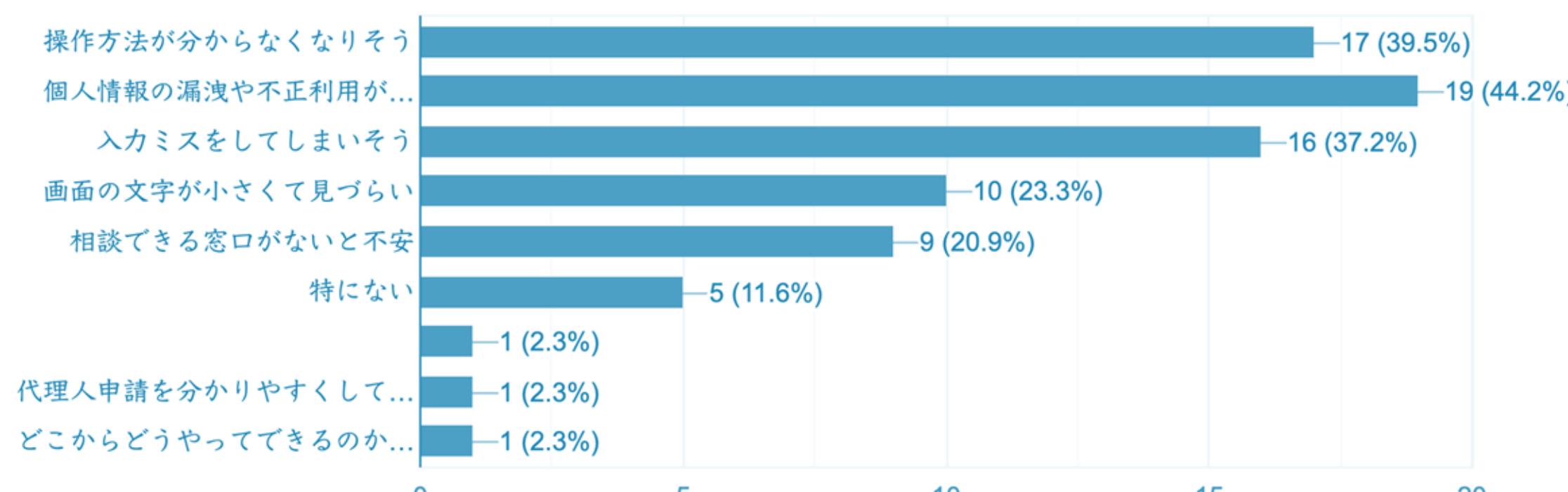
### 2. 現状

#### 課題① スマホ使用が身近ではない

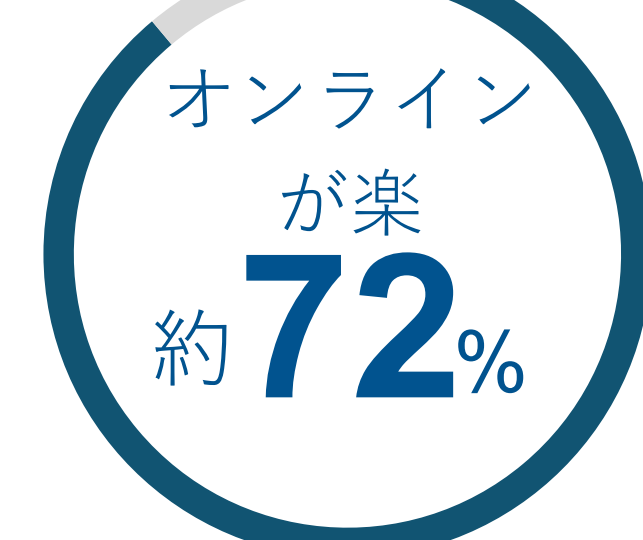
- スマホを持っているのに、近くに使い方を教えてくれる人がいない  
「子供と同居していない」、「教えてもらおうとすると喧嘩になってしまう」
  - スマホ教室に来る人は少ない
- 合計 105講座 131名受講平均 1.25人/講座

#### 課題② スマホに対する苦手意識

- 新しいことを覚えるのは難しい
- 同時に複数のことを覚えることができない
- 操作を誤ったらどうしよう



オンライン申請経験者



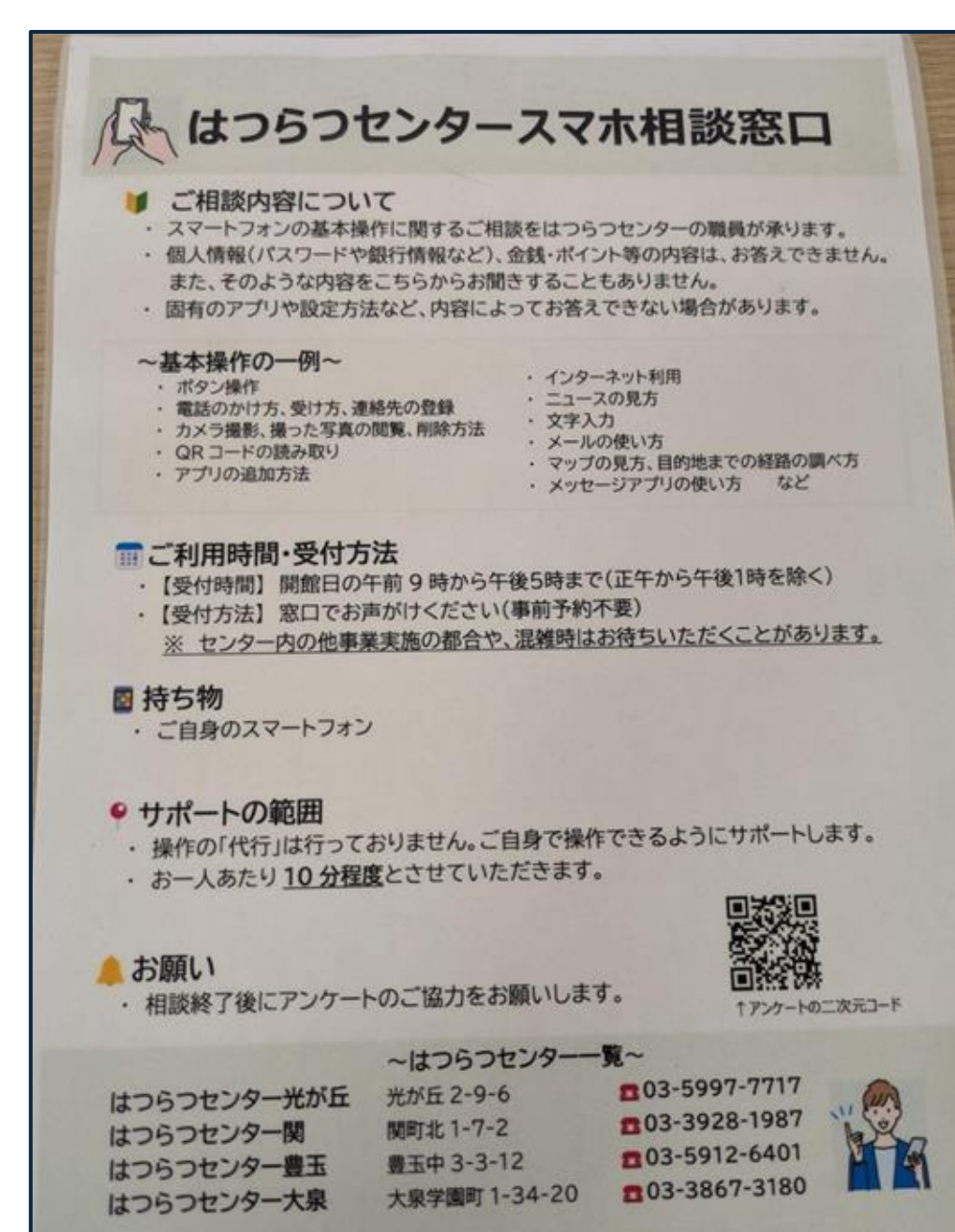
オンライン未経験



### 3. 先行事例

#### ①東京都練馬区

- スマホ教室
  - 相談会、相談窓口 (予約不要)
- 事業所を利用する人が気軽に聞ける環境



#### ②東京都渋谷区

- スマホサロン (予約不要)
- 「参加者同士で気軽におしゃべりや交流をしながらスマートフォンに親しむ場」
- 世代間交流の場に
- 2年間のスマホ貸与
  - スマホ利用に対する抵抗↓
  - 起動者率はLINEが最高



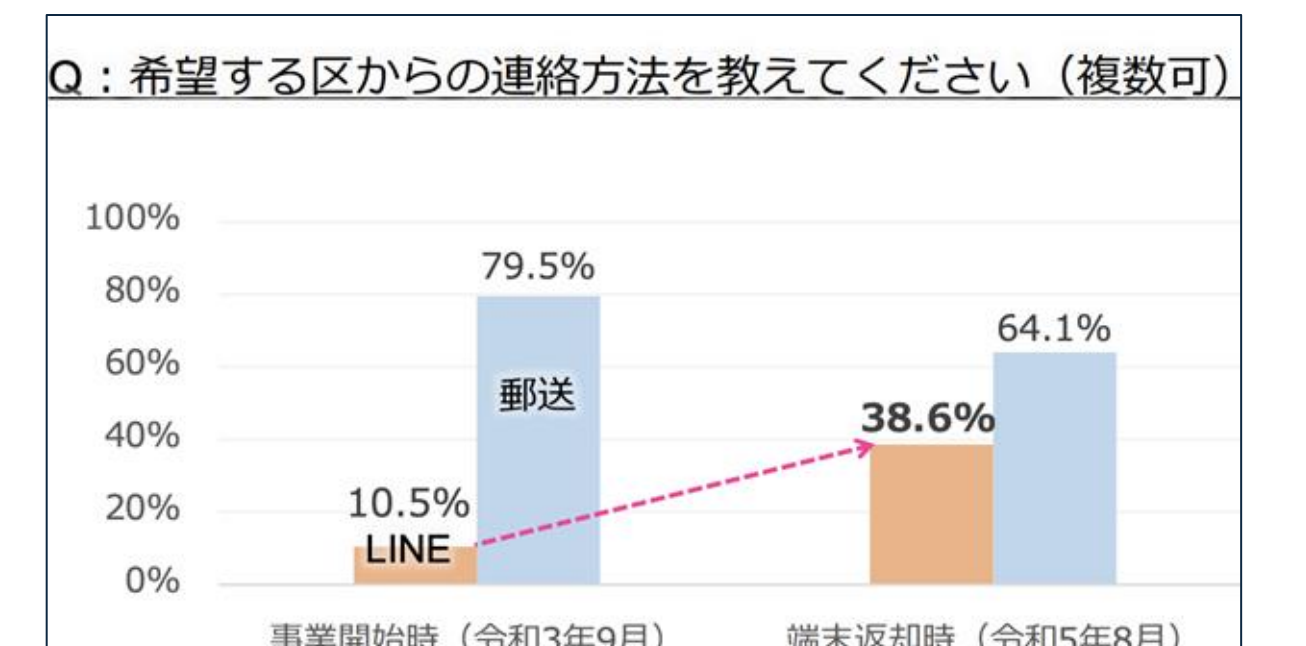
### 4. 政策

#### 課題① に対して

従来のスマホ教室 → 「スマホ相談会」の実施  
紀北町防災ナビ、LINEの紀北町公式アカウントに関するマニュアル配布

#### 課題② に対して

- 現役世代の間には広がりつつある
- 電子申請端末の設置  
→ 役場でも申請できるように
- 広報の工夫  
→ 各課の窓口に掲示  
→ どこで何を申請できるのかが分かるように



高齢者デジタルデバイド解消事業 研究成果報告書 (概要版)より



	スマホ教室	スマホ相談会
形式	一方通行	双方向
内容	・電源の入れ方 ・電話のかけ方 ・LINEの使い方 など	・紀北町公式LINE ・防災ナビ ・グループLINEのやり方 + 日常の困りごと解決
その他	—	簡易マニュアルの配布

電子申請の概要はこちら→



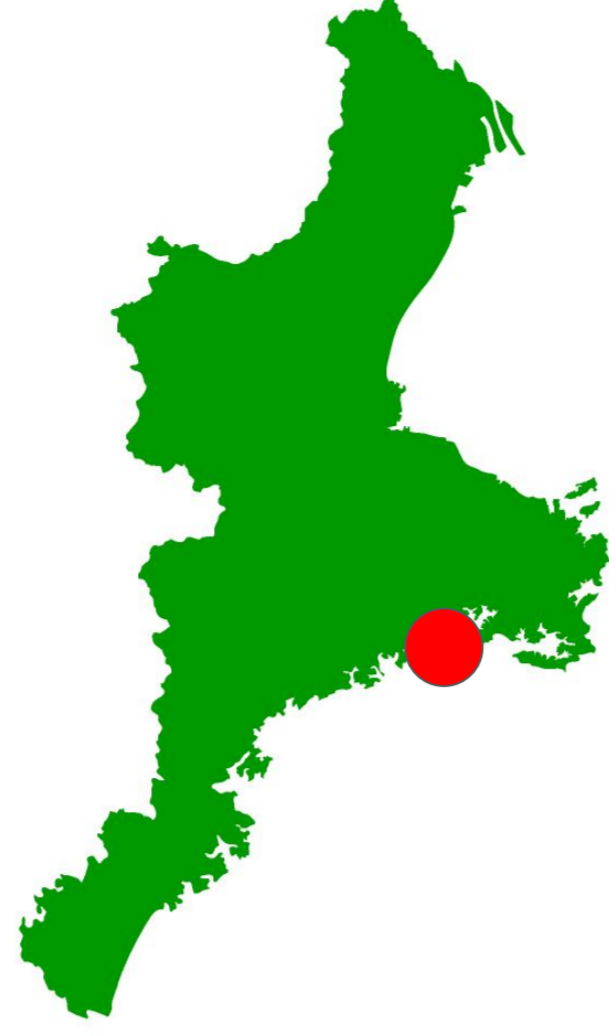
# 三重県南伊勢町『道行竈の日本酒』と『関係人口形成』に向けて

学部2年 下村英理 大学院1年 篠原英一郎 大学院1年 Harsh Animesh

## 三重県南伊勢町 道行竈について

### 【三重県南伊勢町道行竈の概要】

- ▶人口:34人
- ▶高齢化率:73.5%
- ▶リアス式海岸の奥地で、海は静か。
- ▶山と海の小さな隙間に広がる集落。
- ▶いわゆる「限界集落」で、文化保全や集落の維持が課題となっている。



### 【道行竈の日本酒プロジェクト】

南伊勢町・道行竈地区では、「道行竈日本酒プロジェクト」が行われている。このプロジェクトにおいては、集落内に多く点在している「耕作放棄地」を活用し、日本酒の酒米を生産している。そしてその酒米で作った日本酒「純米吟醸道行竈」を各地で販売している。日本酒プロジェクトの開始にあたっては、住民自らが重機や農機を持ち寄り、自分たちの手で荒れた田んぼを復田させた。現在は「NPO法人チーム道行竈」として、酒米の製造・日本酒の販売を行っている。

上:道行竈の海 左:耕作放棄地  
左上:道行竈の水田

## 道行竈を取り巻く課題

### ▶人口減少と文化の継承

既に人口が30人程度であり、実質的な住人はより少ないと見込まれている中、集落時代の存続を考えざるを得ない状況である。また、この集落は平家の落人が集まって形成されたとされる。伝統的な祭事や行事の伝承者は高齢化している。書籍や映像等で文化を後世に語り継ぐ取り組みは実施されている。

### ▶関係人口の継続性

道行竈の日本酒プロジェクトを通して、東京大学FS含め数多くの大学生・若者が道行竈にこれまで関わってきた。しかし、多くの場合は一度きりの関わりで終わってしまい、それ以降は「関わりたくても関われない」という状態である。

### ▶道行竈の売上向上

道行竈の日本酒プロジェクトは、道行竈の文化や伝統を広く内外に伝えるツールとなっているが、それ自体の売上は厳しく、住民の方は基本ボランティアでプロジェクトの手伝いを行っている状態である。商品販売による経済的利益はほぼ得られていないのが現状だ。

## 私たちのスタンス

### ▶人口減少と文化の継承(集落の存続など)

この課題そのものを解決するのは、住民感情や長期的目線が必要となるため私達には困難であると判断している。

### ▶関係人口の継続性

この課題は、東京にいながら私たちが取り組みうるものであると解釈している。これまでに関わった人たちを何らかの形で繋ぎ止めるシステム作りが必要である。

### ▶道行竈の売上向上

この課題も我々が取り組みうるものであると考える。特に関東圏での販売などは、強力なバックアップとなれるはずである。

## チームの特色

このチームのメンバーは昨年度のFSで同じく三重県南伊勢町道行竈を担当したメンバーとそうでないメンバーが混ざり、前年度FS生との関わりと、アイデアの新規性の両立に努めた。

## 第一回現地活動

第一回は9月に実施。純米吟醸道行竈は伊賀の日本酒製造会社に製造を委託しているため、その見学と、住民の方との顔合わせをかねたパーティーを実施。敬老会に私たちが相乗りさせていただく形。昨年度FSメンバーをお誘いし、前年度と今年度の接続を実現した。



## 第二回現地活動

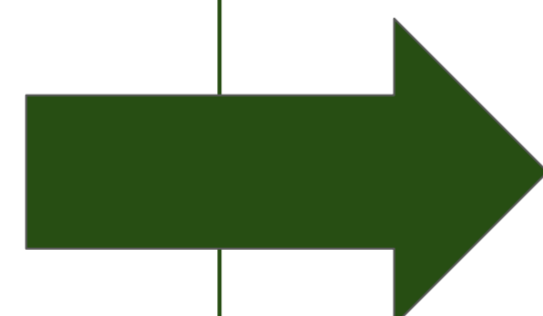
第二回は12月に実施。新酒の発売時期に合わせる形での開催。南伊勢町のイベントで道行竈の販売を実施。その他、南伊勢町の関係人口である学生や移住者の話をおききしながら、関わる方法などを模索した。

## 第三回現地活動

第三回は発表会の実施を軸に、他の集落の散策や道行竈の新しい商品作り等の打ち合わせ等を実施。米ぬかをいただいて試作品作成中。また、南伊勢町にふるさとワーキングホリデーとしてきている学生たちとも交流し、関係人口の幅をさらに広げる機会となった。この場で会った多くの方が本年の文化祭にスタッフとして参加いただく予定。

## 案1:文化祭の継続

昨年よりスタートした道行竈の日本酒を東大の五月祭で販売する企画は、本年以降も継続的に実施する方針となった。単に日本酒を売る機会とするのではなく、南伊勢町の関係人口たるスタッフたちの横の繋がりを可視化し、「東京にいながらでも関わる機会」を作ることを目指す。



## 案1・2の補足

五月祭で発生した売上を、昨年分は修了生が南伊勢町にくる交通費の原資とした。ただ、この方法では利益配分が偏らざるをえず、道行竈への利益が少ない。本年は改良し「道行竈の売上の原資を活用した会員制サービス」の運用を行う。具体的には、参加したスタッフや関係人口に対し、関係度合いによって独自仮想通貨「MICHYUKU COIN」を配布。MICHYUKU COINの保有量に応じて、道行竈の日本酒やその関連商品を提供する。たとえば、12月の新酒の時期には、道行竈の新酒の無料クーポン券等を提供する。その原資として、来年度の文化祭の利益金を活用する。また、案3で取り上げる各種新商品のお試しなどをこのコイン保有者を対象とするなど、「街にかかわっている」という感覚を感じさせるようなシステムを運用していくことを検討している。なお、本システムの運用主体は本年度のFSメンバーとし、運用等も見越してメンバーのNPO法人との関係構築(社員など)を現地の方と検討中。



## 案2:会員サービスの提供

来年度より始まる「ふるさと住民制度」に近いシステムを集落単位で実施する。道行竈に関わる学生・若者を道行竈の会員として帰属意識を醸成することを目指す。日本酒や新製品の試用等、関係人口として特別な体験を提供できる仕組み。運用方法の詳細は右に記載



## 案3:非売品の活用

現在は酒粕や米ぬかなど、日本酒製造時に発生するものを基本的には商品とはしていない。今後化粧品や石鹸等の開発を行い、さらなる販路拡大を目指す。特に日本酒は駒場祭では出せないように、非アルコール品の製造は今後を見据えると重要課題である。

## 謝辞・感想

道行竈の住民の方は、とても素晴らしい方々です。いつも私達をあたたかく歓迎していただきます。そして、みなさん元気な方々ばかりです。だからこそ、私達は何とか力になりたいと思うわけです。役場のみなさま、チーム道行竈の方々はじめ、昨年度FS生、南伊勢町関連の大学生方含め、全ての方に感謝申し上げます。



### Member

M2 Ryoma Hirai M1 Azuki Taniho  
M1 Chihiro Ito B4 Ko Nakamura

### Assistant (in Nagahama city)

Masashi Hotta Ayaka Murata

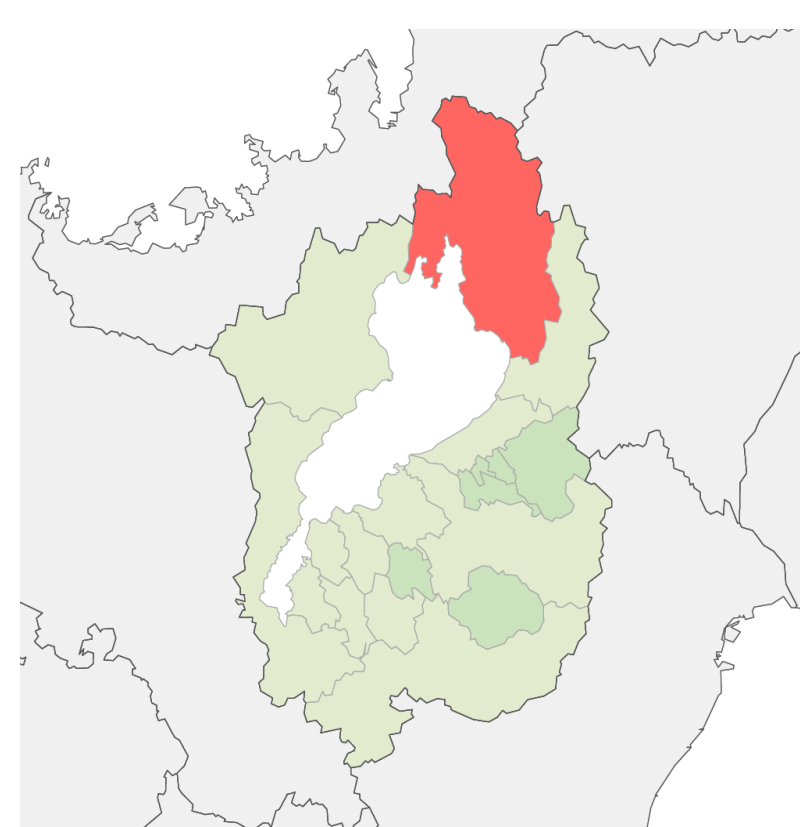
## 大学生との継続的なつながりを創出する

### Create lasting connections with university students

## 地域や活動の背景 | 山裾に広がる田園風景が魅力の田根地区で9つの大学の学生が活動

### Background | Students from nine universities are engaged in community activities in Tane, a rural town.

#### ■対象地：滋賀県長浜市田根地区



Map-It マップイット | 地図素材サイトより引用  
<https://map-it.azurewebsites.net/ja/License>

・滋賀県長浜市は琵琶湖と山に囲まれた自然豊かな土地です。  
→第一次産業から第二次産業、第三次産業まで充実しています。  
→観光名所としては黒壁スクエアや、湖に浮かぶ竹生島へのクルーズなどがあります。

・田根地区はそんな長浜市を囲む山々の麓にある人口1000人程度の小規模地区です。

#### ■田根地区と大学生

田根地区と大学生の交流は**2007年**に始まった。慶應義塾大学の先生が、古民家移築の調査で訪れた田根地区を気に入り、学生30名を連れて再訪した。それをきっかけに、海外を含む多くの大学との交流を経て今に至る。新型コロナウイルスの影響で途切れた時期もあったものの、現在も**京都橋大学、慶應義塾大学、専修大学、東京大学、人間環境大学、立正大学、早稲田大学**等との協働・交流を行っている。

東京大学フィールドスタディ型協働プログラムとの協働は**2021年度**に開始され、今年度で5年目である。初年度は新型コロナウイルスの影響により、オンライン交流が主であった。2022年には**田根地区の地域おこし協力隊として堀田氏が着任し、「大学との繋がり」の創出**をミッションとして活動。その後のFSの受け入れを行う。2023年度には大学との協働を支えるスポンサー企業を探したが実現には至らず、2024年度には今年度と同じ「**大学生との持続的な繋がり**の創出」というテーマで、**ホームカミングディ**を開催した。

## 現地活動 | 地域の方々や他大学の学生と交流し、方向性を探る

### Field Activities | Dialogue with Local Residents and Inter-University Collaboration

#### ■第一回現地訪問

- ・田根地区の歴史・文化を体験
- ・継続的に訪れる大学生の動機を調査
- ・訪問意欲を高める重要性を再認識

第一回訪問では、長浜の観光地を巡り外から若者が訪れる背景を探る一方、田根地区では地域住民との交流、そして他大学生への聞き取り調査を実施した。そこで見えてきたのは、多くの学生が田根での温かい出会いや学生間のコミュニティに惹かれ、また戻ってきたいという双方向の関係性だ。

一方で、**二次交通の欠如や宿泊場所の属人化**といった課題が浮き彫りになった。**人を惹きつける原動力や学生同士の横の繋がり**に着目し、今後は訪問のモチベーションを最大化する方向で提案を進めていく方針が固まった。



↑現地にて撮影した、同じタイミングで活動した他大学の学生との集合写真

#### ■第二回現地訪問

- ・ホームカミングディの実施に向け、現地の方や他大学の方と意見交換
- ・郷土料理の試作を実施

第二回訪問では、**第三回訪問時に実施予定のホームカミングディの具体的な内容について、現地の方々や他大学の方と意見交換や情報収集を行い、検討を進めた。**議論の中で、より長浜市、田根地区らしい取り組みを行いたいという方向性にもなり、当日は郷土料理である「じゅんじゅん」の調理を企画の一つとすることが決定した。その後、当日に向けた課題を洗い出すために、実際に試作・試食を行った。試食の際には移住者の若い夫婦や地域活動に積極的に関わっていらっしゃる方々とお話をする機会もあり、**地域への理解が深まった。**



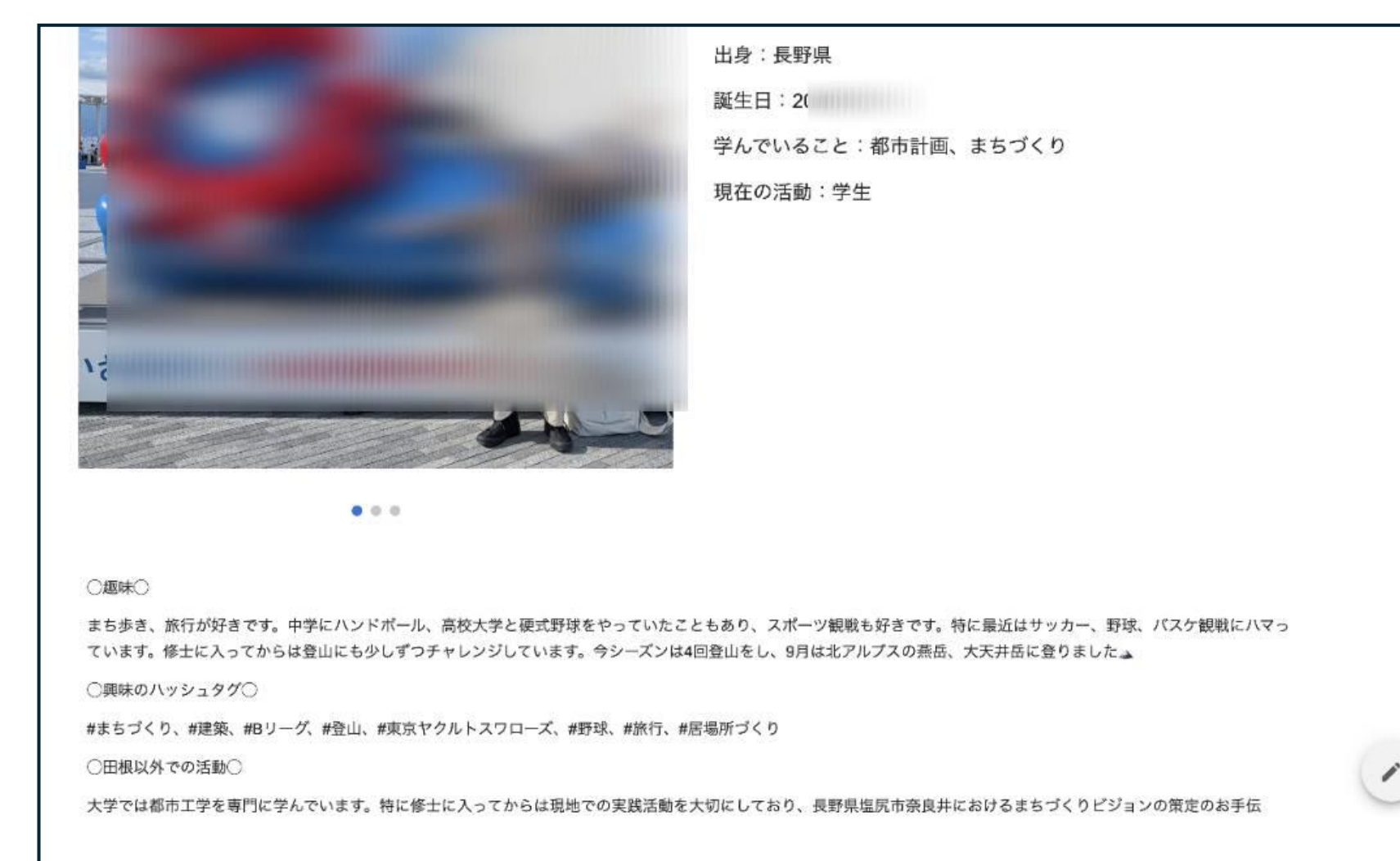
上：じゅんじゅん試作会の様子  
下：地域の歴史ある神社を訪れた際の一枚

## 提案と実践 | 内部向けWebページ作成とホームカミングディ開催で大学生の関わりを増やす

### Proposal & Implementation | Boosting Student Engagement via an Internal Website and Homecoming Day

#### ■施策1：内部向けWebページ作成

これまで田根地区に関わった大学生の数は非常に多い一方で、多様な大学生同士のつながりは、**特に代を超えた縦のつながりが弱い状態**であった。田根での活動という共通点がある仲間同士がつながり、学生自身の将来に向けた有益な機会となることを目指し、OBOGも含めて活動したメンバーの様子が見えるよう、大学や代ごとの活動概要、各個人の簡単な紹介が見ることが出来る内部向けWebページを整備した。**現地で顔を合わせる際の話のきっかけとなったり、同じ興味関心がある人同士が話すきっかけとなったりすることを期待している。**



↑個人ページのイメージ。その人の人となりがわかる写真や趣味、学んでいること、田根地区への思いなどを掲載

#### ■施策2：ホームカミングディの実施

昨年度のFSチームが実施した初回のホームカミングディの成果と課題を踏まえ、今年度はイベントのさらなる充実化と継続に向けた礎を築くことを目標に企画運営を行った。**今回の特徴は、東大チームは企画の内容や大枠を検討し、一部コンテンツの具体的な内容の検討・準備・運営は他大学にお願いするなど他大学と協働しながら創り上げたということである。**それにより、企画当日の大学生同士の繋がりはもちろんのこと、企画準備を通じて現役メンバーの大学を超えた「横の繋がり」も育むことができた。今後もこのホームカミングディを継続的なイベントとして定着させるとともに、企画段階から多くの大学と協働しながら大学生同士、大学生と地域とのつながりを深めていって欲しい。



↑大学別活動報告会・田根サミット実施後に、参加者全員で撮影した集合写真。



↑参加者皆で餅つきをしている様子  
→参加者の募集に使用したポスターとホームカミングディで実施した企画の内容

1月告知版  
Homecoming Day in TANE, NAGAHAMA  
第2回田根ホームカミングディ  
For OBOG For Students For TANE People

スポーツ企画  
About 12:00~  
もちつき大会  
About ~16:00  
大学別活動報告会  
2026  
田根サミット  
2026

参加費・場所未定  
【参加費:500円程度】  
@まちづくりセンター  
湖北の郷土料理「じゅんじゅん」を囲んで!  
【参加費:1000円程度】  
@まちづくりセンター  
About 16:00~20:00  
田根を題材にみんなでゆる〜く地方を語る!

3/8 SUN  
植谷邸DIY  
About 8:00~12:00 @植谷邸  
三輪神社の「春祭り」見学  
About 13:00~15:00  
@田根地区谷口町

ついに、申込開始です!!  
久しぶりの仲間と田根で再会!

途中参加・一部イベントのみの参加も大歓迎です!  
作成・企画 2025年度東京大学FSチーム 伊藤・中村・谷部・平野  
お問い合わせはDiscordもしくは連絡先メールまで!

申込×切 2/8  
参加フォーム

#### 参加大学生の感想

- 全国から来て、それぞれの異なるバックグラウンドを持つ人々と話せたのが楽しかった。また来たい。
- 3年ぶりに来たとは思えないくらい密度の濃い体験できた。DIYには初挑戦ではあったが、はまりそうだと感じた

# 2025年度FS 和歌山県岩出市活動報告

## ～潜在利用者層へのアプローチ～

メンバー：橋本啓吾、土田崇生、中島陶冶

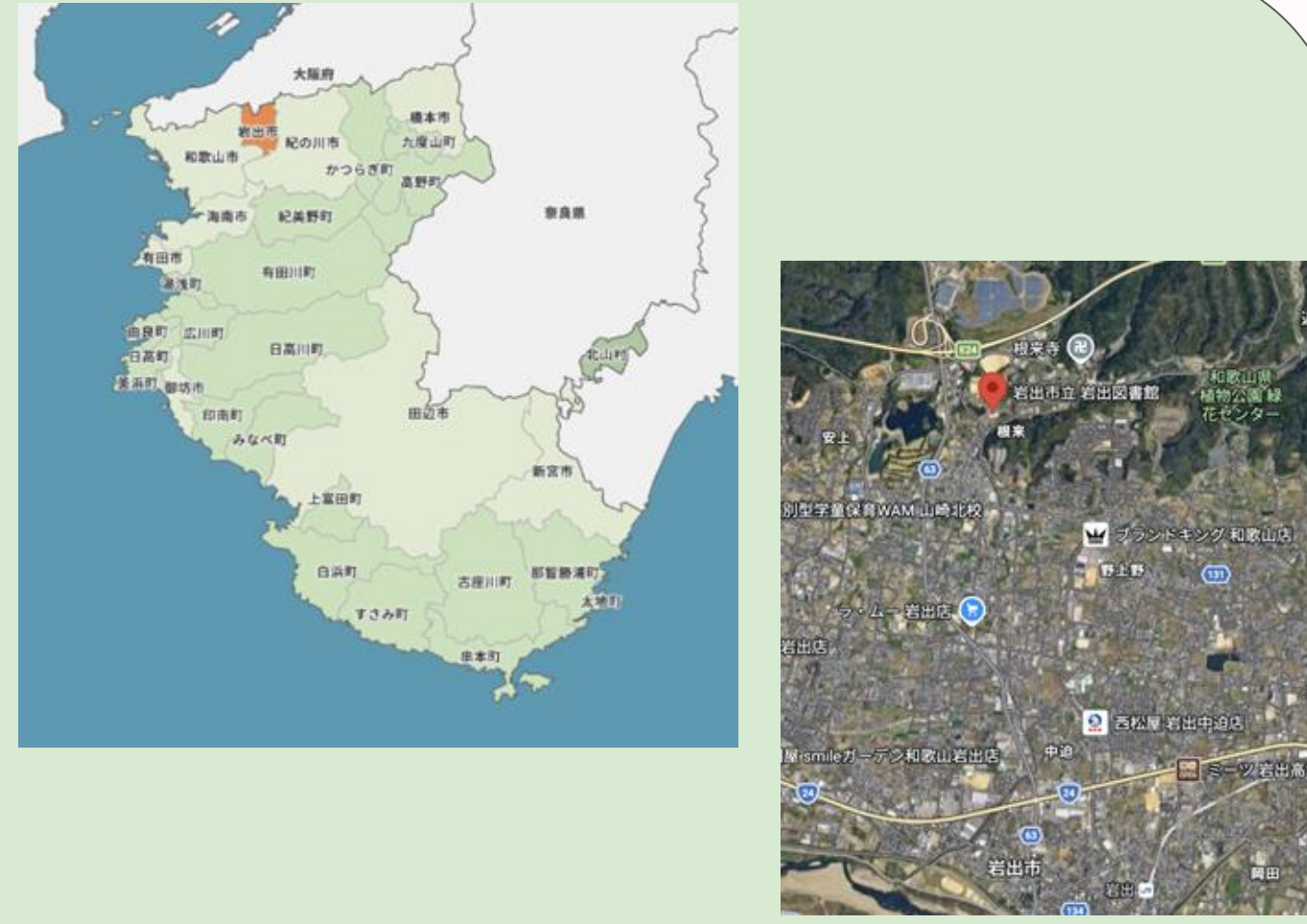
### 概要・課題

#### 岩出市

- 人口：53,696人（令和8年度1月末時点）
- 特徴：家族増加傾向のベッドタウン

#### 岩出市立岩出図書館

- 蔵書数：約38万冊（平均：約13万冊）
- 来館者数：約13.7万人
- アクセス：  
本館までは岩出駅から車で約17分  
（分館の駅前ライブラリーは徒歩1分）
- 公民館に分室が数個あり



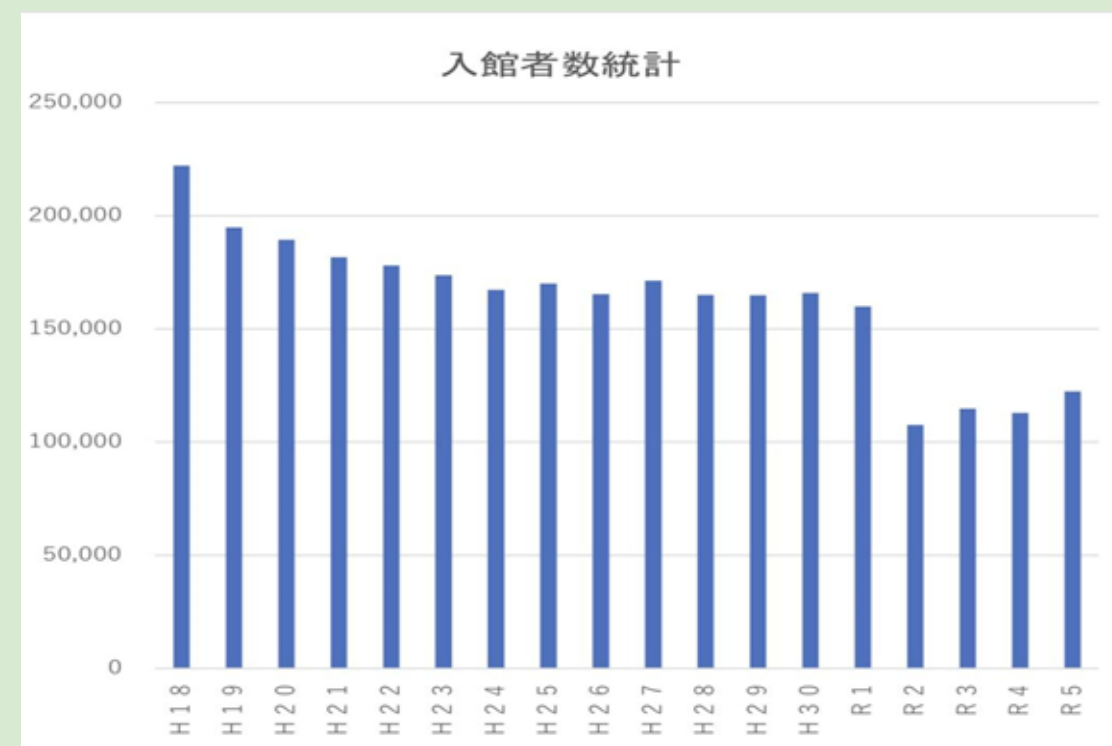
### 課題・背景

#### 【課題】

- コロナ禍後の利用者数の減少（特に潜在利用者層）
- 若者を中心にそもそも図書館を利用しない人も多数存在

#### 【背景】

- 立地の面から、子供達だけで来館するのが困難
- 若者の本離れが加速している
- 中高生は部活で忙しい



### 現地活動

#### 第一回（8/23、24）

##### ・キャリアカフェの実施

地域の学生に向けて自らの受験経験を講演  
来年度以降も継続して実施予定



#### 第二回（12/6、7）

##### ・謎解きゲームの実施

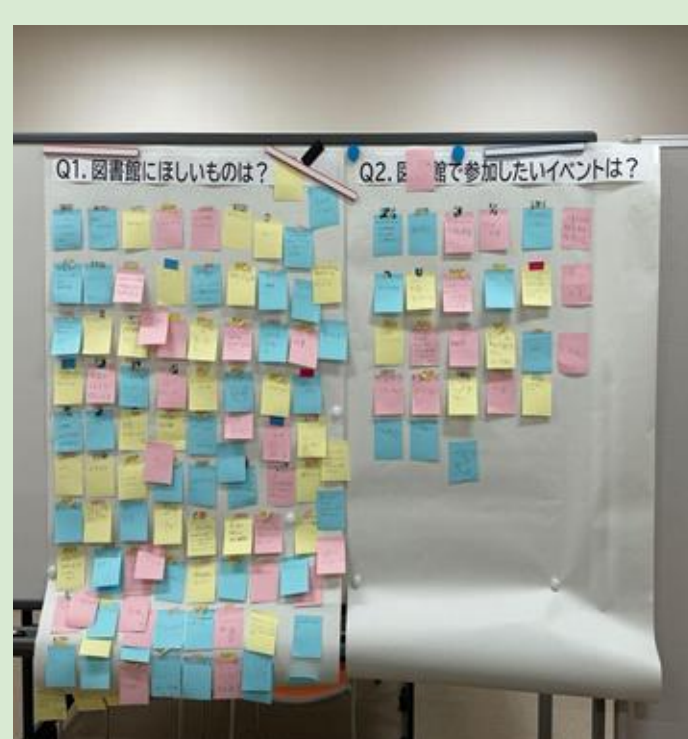
スタートコース(初心者向け)  
→参加者129名、応募81名、正解者71名  
チャレンジコース(上級者向け)  
→参加者96名、応募41名、正解者28名



若者を中心に多くの方に参加していただいた。  
再開催を望む声も聞かれ、継続開催への  
足がかりとなった。

##### ・目安箱の設置

主に既存の利用者の視点を取り入れることを  
目的として、図書館への意見を募る



##### ・図書館の司書の方々との意見交換

##### ・学生との交流(相談会)

### 提案内容

#### 駅前ライブラリーのライトノベルを漫画に

駅前ライブラリーは主に学生の利用が期待されており、ライトノベルもその一環で配置されている。しかし、データから主に中高年がライトノベルを借りていることがわかり、**需要と供給のギャップ**を解消するため、若年層に人気の高い漫画や学習参考書などを配置する。

#### 自習室の拡充+若者向けイベントの定期開催 (謎解きイベントなど)

若者の本離れが加速する中で、**まずは図書館に来てもらう**ことが重要。テスト期間などでは自習スペースが不足する場合があります、拡充する必要がある。若者をターゲットとした、謎解きといったイベントも若者の来館者数増加につながることを現地活動で実証された。

来館してくれた若者に本を手にとってもらうために

#### Wi-Fiの導入+QRコードを用いた本の紹介

現状では、本の帯がない図書館の本の性質上、本のジャンルやあらすじがわかりづらい。つまり、大量の本があり、選択肢が多いにもかかわらず、読む本を選ぶ際の判断材料となる情報が少ない。いわば、**本を手取るハードル**が高くなっていると考えられる。これを受け、QRコードを読み取る形で、本のあらすじや以前借りた人の感想などを知ることができれば、特に若年層などは本に触れる機会が増えるのではないかと考えた。Wifiに関しては令和8年度の予算に計上済み、QRコードの案についても試験的に実施済み。



若者の本との触れ合いを一過性のものにしないために

#### 借りた本の履歴を確認できるシステム (読書通帳など)

目安箱で多く寄せられた意見でもあり、この一ヶ月で何冊の本を読んだかなど、具体的な数値を確認することができれば、それにより得られる達成感により**読書のモチベーション向上**につながる。若者の読書習慣の定着につながれば理想である。Wi-Fi実装後、マイ本棚の機能を周知して対応する予定。

### 今後の展望

岩出図書館の利用者数は自治体側の努力もあって、年々回復傾向にある。重要なのは、その傾向を持続的なものにできるかどうかである。その中で、既存の利用者の回復のみならず、若年層をターゲットとした**新規の利用者の獲得**をも目指していくことが肝要である。

今回のイベントでは一定の成果も見られたが、**人手不足**の中でFS生が抜けた後も同様のイベントを定期的な開催できるように業務の効率化を含めた**環境整備**が必要である。

### 活動を通じて

自治体の方々には普段の業務もあり、大変お忙しい中でイベント開催へのご協力やたくさんのおもてなし、私たちの疑問にも丁寧に回答していただきました。この場をお借りして感謝を申し上げます。本当にありがとうございました！

# 色川地区 × 都市を巻き込んだ獣対策

石野礼愛, 奥田朗盛, 片桐美咲, 石川智大

## 色川地域とは

- ◆ 平安の落人伝説が残り、1000年の歴史を有する
- ◆ 昭和30年に色川村は那智勝浦町となる
- ◆ 鉱山で栄えるが、鉱山閉鎖後、人口減少と高齢化が進む
- ◆ 村存続の危機



## 里山地域としての暮らし

### <代々受け継がれてきた歴史>

- ◆ 集落の中で完結する特徴的な人生
- ◆ 先祖代々受け継がれてきたことでの暮らしの厚み

### <人とともにある里山の自然>

- ◆ 先人が山を切り開いて築いた棚田
- ◆ 大木が生い茂る里山

### <移住者受け入れ>

- ◆ 1975年有機農業を志す移住者の訪問
- ◆ 住民の間に話し合いが行われ、「よそ者」の受け入れが始まる。
- ◆ 現在は現役世代の多くは移住者

異質なものへの理解と寛容性

## 課題の原点

### <現状の課題>

コミュニティの担い手不足・負担集中

農業収益の不安定化

自然との関係が「共存」から「対立」へ

### ○地域の持続可能性の低下:

人口減少に加え、産業の弱体化により、地域を維持する力が年々失われている。

### ○魅力の再発見が必要:

豊かな自然や資源があるにも関わらず、その価値が十分に発信されておらず、外部からの関与が希薄。

## 今回取り組むべき課題

### <理想の暮らしの崩壊>

サルの被害で田んぼが不定期に荒らされる。  
 ・イノシシに畑を荒らされ、自給自足すら困難。  
 ・対策する資金も人手もなく、リスクは年々増大。

### <今回取り組む内容>

鹿・猪・猿による獣害が  
 → 農作物被害  
 → 労力増大  
 → 収入減少  
 → 担い手疲弊

背景にはコミュニティ機能低下

## 解決策一色川地区 × 都市による新たな組織

ボランティアや行政に頼らない、自律型組織を構築する

### <色川住民の想い>

#### ◆ 資金の獲得の難しさ

個人個人のアイデアから活動にいたることもあり、行政などからの迅速な資金援助が難しい

#### ◆ コミュニティの減少

色川地域は人口減少が進んでおり、特に、若い世代が少ない

#### ◆ 外部との連絡手段の限界

自然との共生による自給自足に根差した暮らしが主流で外部との接点を十分にとることが難しい



## DAOをもちいた仕組みにより都市と色川地域をつなぐ

## DAO(分散型自律組織)

### <オンラインでのプラットフォーム>



### <DAOとは>

参加者全員で話し合い、投票などによって方針を決める仕組みで動く組織。従来の会社のように社長のような管理者がいらない、オンライン上で参加できる。

#### ◆ 資金調達の柔軟性とスピード

EC販売や寄付をダイレクトに対策費用へ充て、即座に行動に移せる。

#### ◆ 「関係人口」の資産化

一過性の参加ではなく、デジタル村民権などのインセンティブにより、継続的に関わる動機を作る。

#### ◆ 共感による拡張性

地域の魅力を発信し、課題解決そのものをコンテンツ化して外部の人材を巻き込む。

## 五月祭での取り組み内容

食べる行為が直接的な「地域の守り」に繋がることを可視化し、支援を募る。

### 1 食の提供

鹿肉ジビエソーセージ  
日本酒「那智の滝」



### 2 つくったひと=住民との対話

林業・狩猟・ものづくりなど、多様な分野に携わる色川メンバー5名来場  
来場者との直接対話

### 3 展示・参加型企画

色川の手作り物販  
クイズ企画(里山の暮らし)  
動画・写真展示



⇒「味わう × 聞く × 考える」体験

## 五月祭から描く未来

## 獣害対策

産業化・基盤防衛: ジビエ・革製品の販売と、防護柵の設置。  
まずは物理的に農地を守り抜き、初期の支援者コミュニティを形成する

## 地域運営

農業支援・労働力提供: 確保した関係人口(DAO)を、人手不足の農作業や草刈りへ提供し、地域の担い手を補完する。

## 自律社会

持続可能な村づくり: 地域通貨の活用や空き家再生を通じ、外部資本に依存しない自律的な地域モデルを確立する。

## まとめ

色川地域には独自に根づいた、コミュニティや豊かな自然が存在する。色川地域の里山集落持続可能性を守るため、地域の魅力を再定義し、都市と色川をつなぐ仕組みを構築する。

### <現状の課題>

- 里山集落の持続可能性
- 里山集落の魅力の再発見

### <今後の展望>

- 獣害対策
- 地域運営
- 自律社会



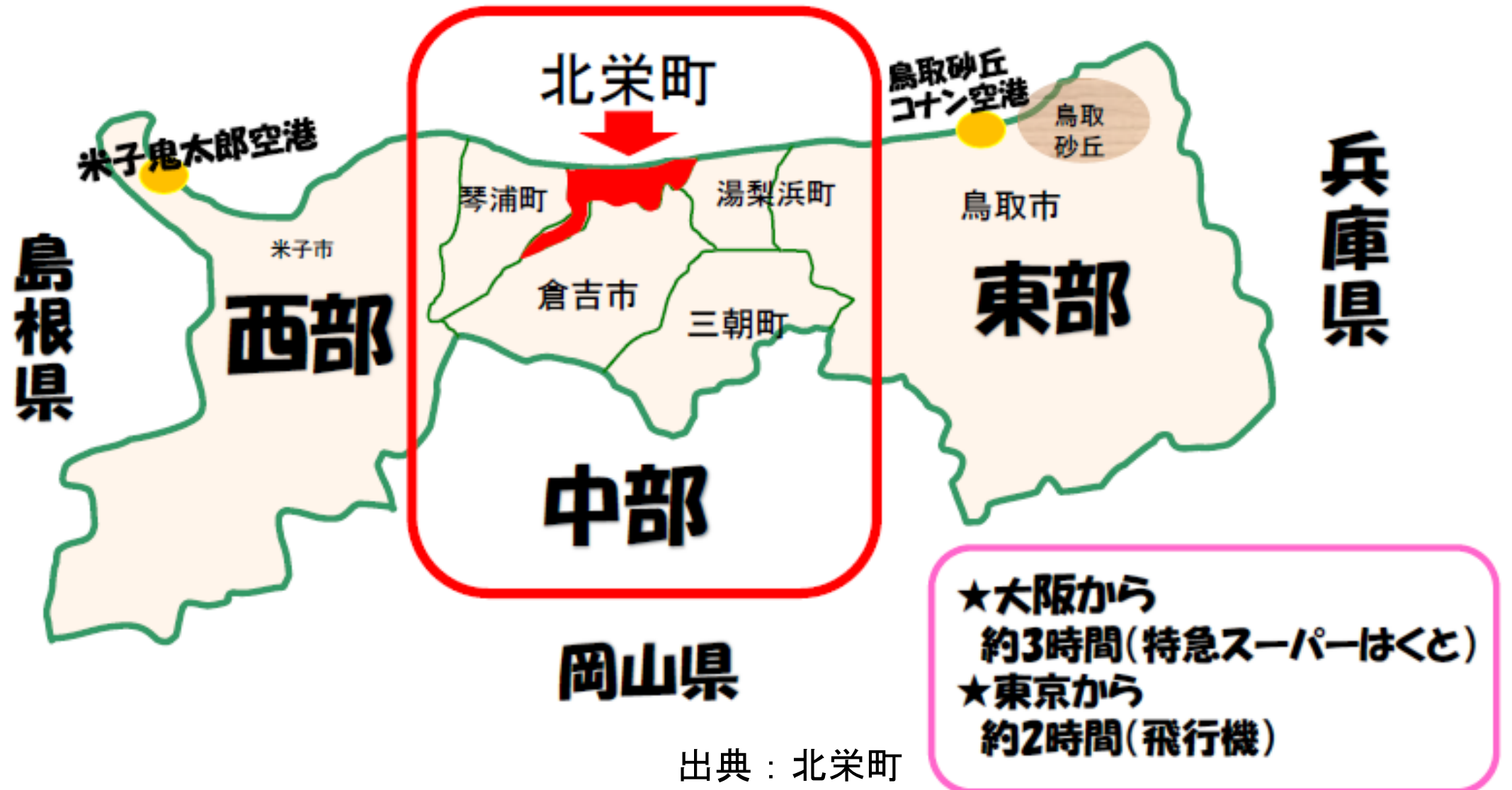
# 鳥取県北栄町「関係人口の拡大を目指して」

稲葉佑太 植村真乃 小野川雅彩 李晶晶

## ○鳥取県北栄町とは？

鳥取県中部に位置する「農業と観光のまち」

<b>農業</b>	耕地率県内1位・生産額約90億円 大栄西瓜、ねばりっこなどオンリーワンの農作物
<b>観光</b>	国内外から毎年23万人以上のファンが訪れる、「名探偵コナンに会えるまち」 20代・30代女性がコア層、リピーターが多い



## ○現地活動内容

- <第1回> 関係者との対話や視察を通じ、町の魅力と課題を整理  
関係人口拡大に向けた施策の方向性を決定
- <第2回> 北栄町や周辺地域での追加の調査・意見交換  
「フリーペーパー制作」のアイデアの詳細を検討
- <第3回> 現地報告会にて提案発表・フリーペーパー配布



現地の皆さんとの交流会



移住者の方が運営する民泊

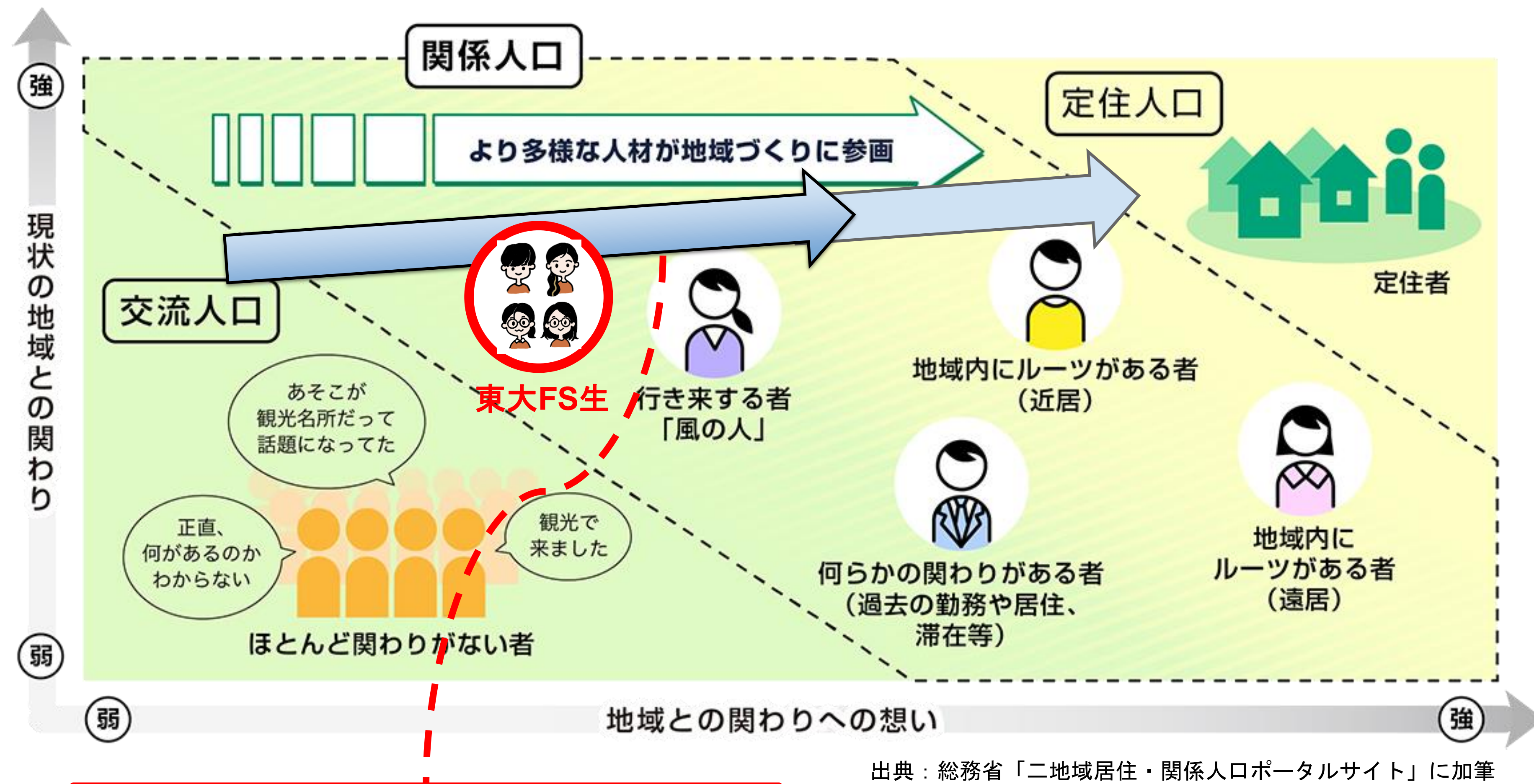
## ○北栄町の課題と提案の方向性

地域との接点につながりにくく、観光客から関係人口に移行しにくい

多くの観光客は「コナン」が目的  
青山剛昌ふるさと館の周辺で観光が完結し、地域内の他の場所を訪れずに帰ってしまう

コナン以外の魅力が伝わっていない

- ・ 町内の飲食・体験・人との交流といった観光資源の情報が、来町前に十分に届いていない
- ・ 移動手段や滞在時間の制約から、来町後に情報を得ても訪問先を追加することが難しい
- ・ 「次にどこに行ったらいいか」を、その場でわかりやすく示す導線が十分に整っていない



認知 ⇒ 参加 ⇒ リピーター ⇒ コミュニティの一員へ...

フリーペーパーやSNSなどで  
地域との接点をつくる

## ○成果物：「人」の魅力を伝えるフリーペーパー

**コンセプト** 地域で生きる人の等身大の声を通して「関わりの入口」を届け、北栄町への関心と継続的な接点を生み出す

主ターゲット：北栄町に観光に訪れたライト層

副ターゲット：町の住民・移住者・事業者や、関係人口に関心のある層



**内容** 地域に対する住民の思いから学問的な話題との接続まで、北栄町の多様な魅力を記事や写真により多面的に伝える全8p

- ・ FS生が町で感じたこと + アイデアの提案
- ・ コナンファンの移住者の方へのインタビュー
- ・ 地域で活動している方の思いが綴られた寄稿

### 展開と今後

- ・ 現地報告会にて配布、今後は町内各所に設置予定
- ・ 町外には設置せず、SNSで広報し来町時に入手いただく

- ・ FS終了後も、移住定住施策との連携でフリーペーパーも進められる予定
- ・ 今回はその試作版。今後は地域の事業者からの広告掲載で運営する方針

## ○活動を通して感じたこと



稲葉 佑太

行政や地元住民と関わり合いながら、地域外の大学生として何ができるのか、何が求められているのか、いろいろと考える1年だった。FSの意義についても思慮をめぐらすとともに、地域に関わることの楽しさに改めて気付かされた。



植村 真乃

地方における人口の流出問題や、どのように人々を呼び込もうとするか、という努力を知ることができた。また、町内の多くの人にインタビューすることで、多様な生き方について学ぶことができた。



小野川 雅彩

そもそも「関係人口」という言葉を知らなかったもので、それ自体が学びになった。地元の人々との交流を通じて、地域の良さをどう外部にアピールするか日々試行錯誤した。



李 晶晶

留学生として地域の課題を現場で知り、地元の方々の暮らしに触れたことは大きな学びでした。外から関わる私にできることを考え続け、関係人口として地域とつながりたいと思いました。

# 島根県江津市チーム

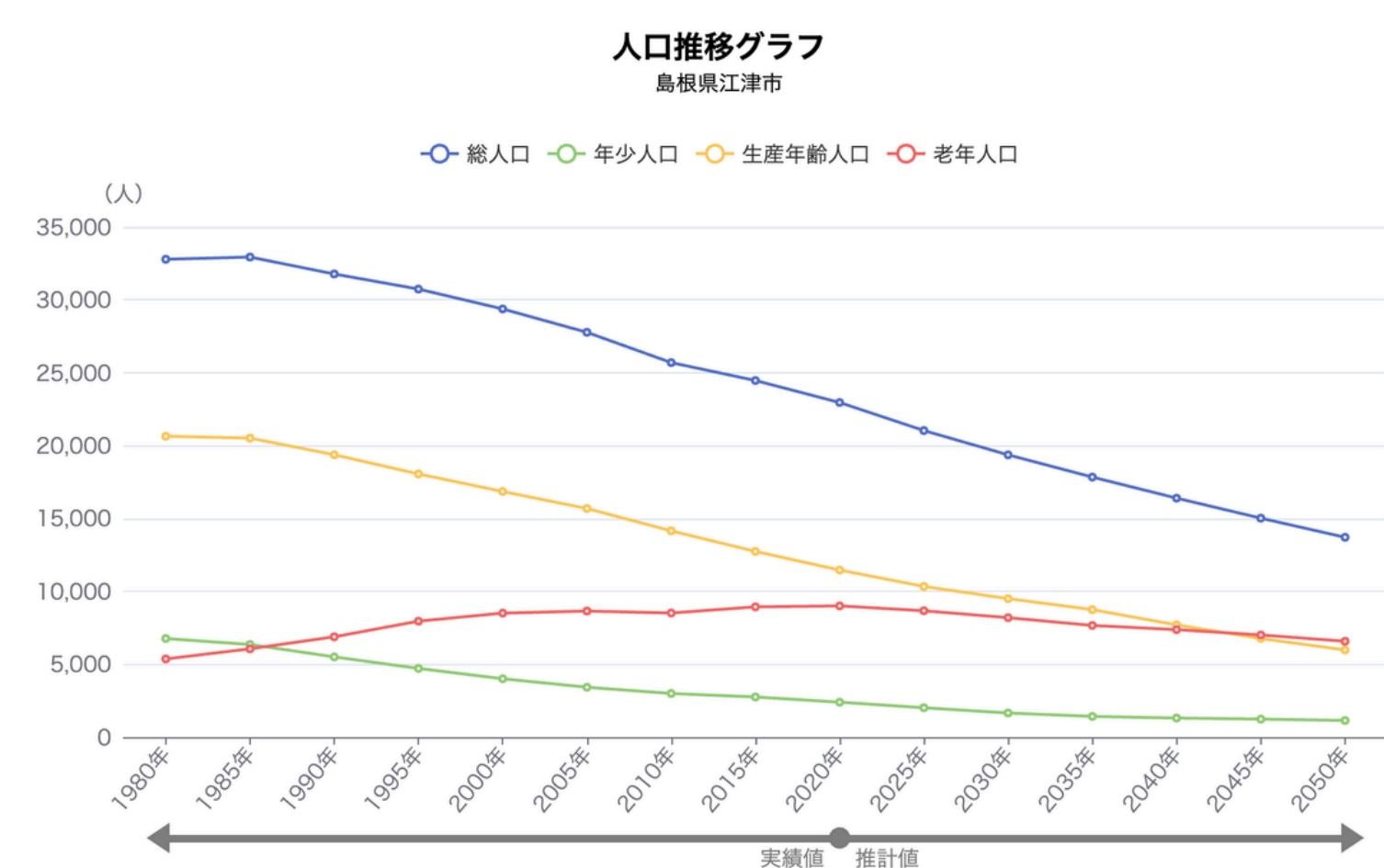
~地元になんだGOTSUかるたの作成~



猪原皐良 奥村紘大 増田大夢 山腰柗真

## ①江津市の概要

石見地方に位置し、日本海に面している自然豊かな都市。中国地方最大の江の川が市内を流れ、日本海に注ぐ。現在でも市内には「石州瓦」の赤茶色の屋根が連なる独特の美しい景観が残っている。



【出典】総務省「国勢調査」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」

## ②我々の目標

最終目標は学校の統廃合を防ぎ、未来の子どもの生活・居場所を守る

江津市へのファミリー層の移住を促進し児童数を増加させる必要がある

東京での活動に加えて江津市内の若年層に働きかけ、将来のUターン需要を喚起

東京での魅力PRと江津市での高校生との協働イベントの2本柱で活動を展開

## ③第一回現地活動



江津市の魅力を知る  
+  
江津市に移住・Uターンして活躍されている方と対談

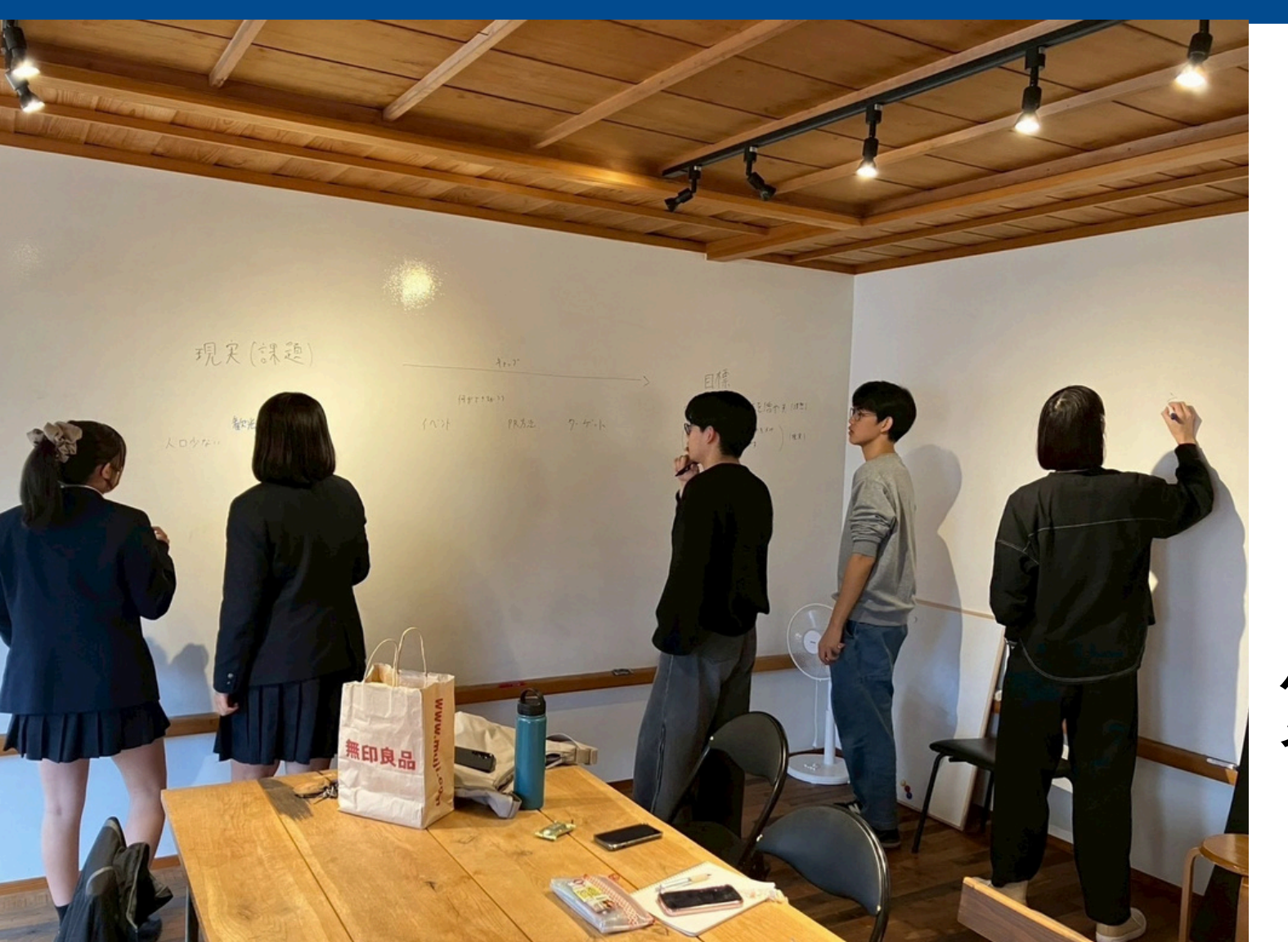
魅力は  
余白+それを受け入れる環境

## ④HCDの出店



桑茶の試飲  
特産品の販売  
我々と地域活性部が制作のチラシ頒布  
↓  
江津市出身の東大OBの方と会う  
江津市に興味が出てきたという声も

## ⑤第二回現地活動



主に高校生とのミーティング  
理想実現への手段を考える  
+  
第三回現地活動の目的を再確認

## ⑥かるた作成

江津市の魅力を知る手段としてのかるた作成

内容は江津になんだ名所や魅力を詰め込んだ。

作成時には現地の高校生やNPO法人でござんとも協力し、市内の駅や市役所に公募ボックスを設置した。

またかるたにはトランプの機能も持たせより遊びやすいよう工夫した。



## ⑦第三回現地活動

### かるた大会

三十人近くの参加者が来場。かるたやトランプをして親交を深めた。



### 現地報告会

市長をはじめとする市役所の皆さんがかるたに興味を抱いた。今後につながる発言も。



## ⑧今後に向けて

今後は作成したかるたを市内の小中学校などへ配布予定  
↓  
「東大FS江津市チーム」としての活動は3月末で終了となる。

### 有志（関係人口）としての継続的な関わり

単年では取り組むことができなかった課題や今年度活動の改善を今後も行いたい。江津かるたの改良・第二回のかるたイベントなど来年度も江津市訪問を続けていきたい。

1年間活動に携わり、支えてくれた江津市の皆さん本当にありがとうございました！

# 2025年度香川県坂出市チーム 認知症のかたや家族が安心して暮らせる地域づくり

発表者:

石戸菜々恵(経済学部2年)、長内心之介(薬学部3年)、林陶然(法学部4年)、藤川由衣(法学部3年)

## ① テーマ:認知症の普及啓発

### ● 課題① チームオレンジの活性化

- 高齢者数および認知症高齢者数の増加
  - ・各個人の認知症予防の必要性・重要性
  - ・地域で認知症当事者やその家族を支える仕組みの必要性
- その目標のもと結成されたチームオレンジの活動をどう良くしていけるか?

### ● 課題② 若年層への普及啓発

- コロナ禍以降(若年層、特に小中学生への)普及啓発講座が実施できていない現状
- もし家族が認知症になったとき /周りに認知症の方がいるときに取るべき対応を知ってほしい

## ② 「チームオレンジ」とは?

### ● 近隣の認知症サポーターがチームを組み、認知症の人や家族に対する生活面の早期からの支援等を行う取り組み

- 特徴
  - 認知症サポーターと呼ばれる地域のボランティアが中心に
  - 認知症の当事者もメンバーとして受け入れる
- 坂出市のチームオレンジ
  - 今年度から始動。講座を修了した熱意のある住民サポーターを中心に
  - 各地域の公民館などで月1回の活動
  - 参加者は増加傾向、20名ほどの参加があることが多い
  - 内容は折り紙や歌唱、カードゲーム、講座など
- 坂出市のチームオレンジにおける現状の課題
  - 認知症当事者やその家族の参加が少ない
  - 男性参加者が少ない、若年層(40代以下)の参加が少ない
  - 新規参加者の勧誘、運営の持続可能性

## ③ 第1回現地活動(9月)

- 普及啓発イベント
  - 市立図書館にて幼稚園～中学生向けにアルツハイマーデーの啓発イベントを実施
  - 認知症の方に出会った時どう接するかを体験してもらう
- チームオレンジへの活動参加
- チームオレンジの全体会に参加
  - 普段は別の圏域の活動しているサポーター同士が一堂に会する意見交換の場に参加
  - 参加者構成や運営上の課題などを知る
- 個別訪問
  - 市役所の方に同伴し独居の高齢者女性2人を訪問

## ④ 第2回現地活動(2月)

- チームオレンジへの活動参加
  - 2つの圏域の活動に参加
  - 地域の幼稚園年長の児童を呼び、高齢者と触れ合いの機会に
- 介護の現場見学
  - 地域のグループホームやデイケアの見学
  - 市の訪問事業への同伴
- 教育委員会にて発表
  - 段階的な認知症教育の政策案をご提案
  - フィードバックをいただき、意見交換



## ⑤ 課題①の解決案:チームオレンジの活動案

### ● 「チームオレンジ × ○○」を提案

- 「関与するアクターの多様化」
- これを通じてコミュニティの活性化、持続性強化を図る
- チームオレンジ単独でなく地域資源をうまく掘り起こして繋げる
- これまで接点がなかったアクター間の連携を促す潤滑油として市や大学生が出ていく



## ⑥ 課題①の解決案:チームオレンジの活動案

### ● 具体的な提案① チームオレンジ × 子ども

- 第二回現地活動にて幼稚園児との交流イベントを実施
- →自然な形で幼稚園児と高齢者の交流ができていた
- →チームオレンジ参加者にとっても良い刺激になったと好評
- 来年以降の実施も目指す。お話し会の形式で幼稚園で開催、公共の図書館で開催など様々な形態での展開を検討
- 課題:小学校以上の年代との交流のあり方

### ● 具体的な提案② チームオレンジ × 医療

- 港区、文京区の認知症カフェでのフィールドワークを参考に
- 医療従事者の話を聞ける機会として集客を図る
- 課題:実施するとなった時の医療側の参加度や協力具合

## ⑦ 課題②の解決案:段階的な認知症教育カリキュラム

### ● 幼稚園 → 小学校 → 中学生 → 高校の各段階で発達段階に合わせた認知症教育を行う

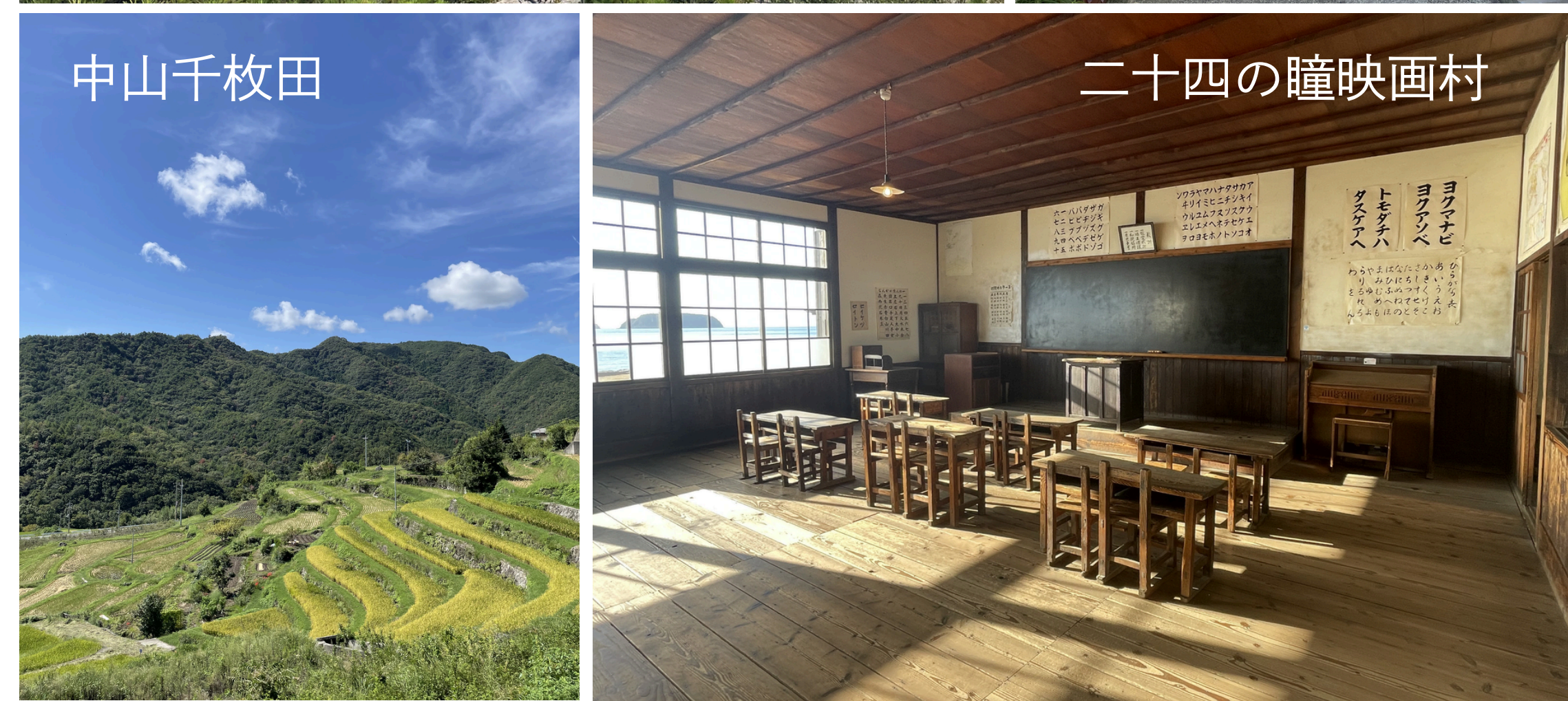
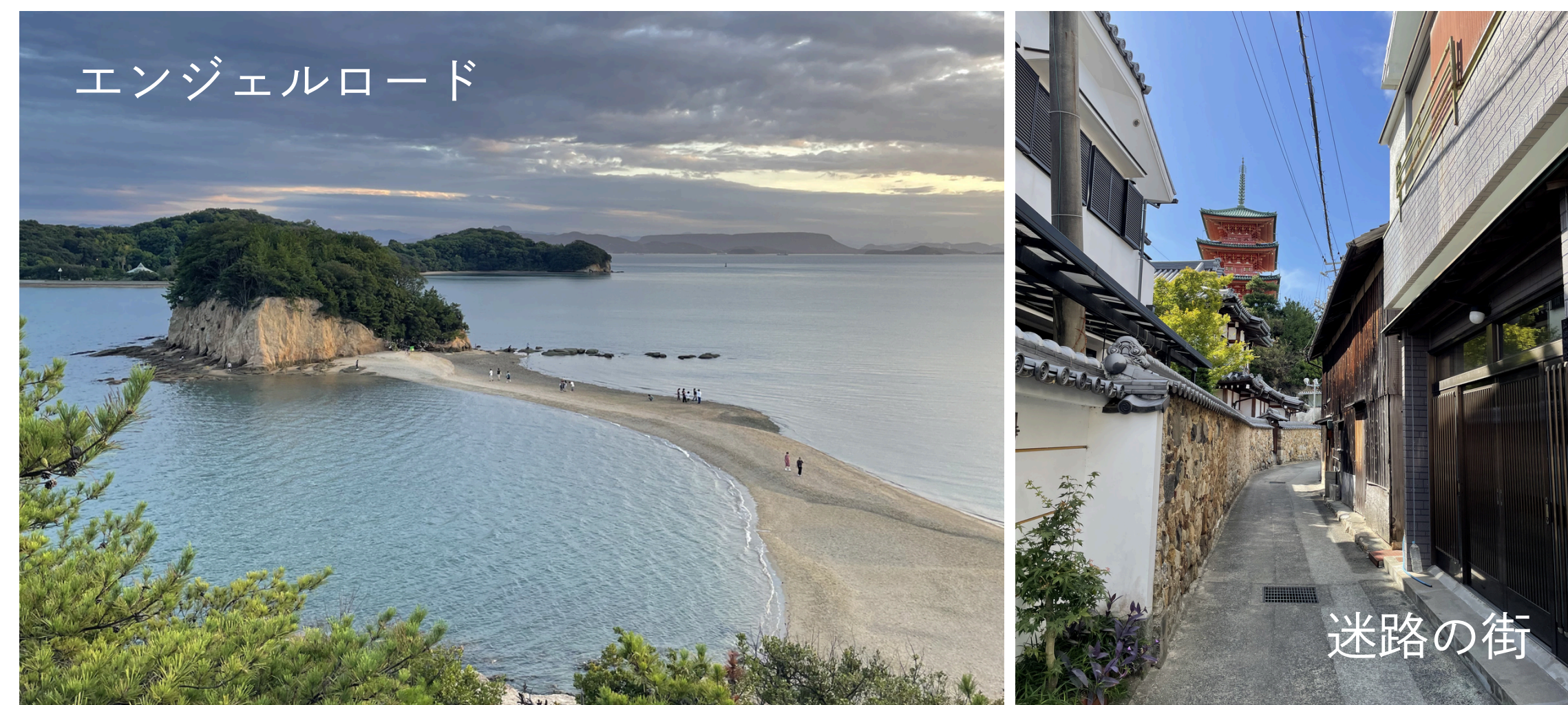
- 目的
  - 認知症を自分ごととして捉え地域の一員として主体的に高齢者を支える役割の自覚を促す
- 特徴
  - 10年をかけた継続的な教育
  - 多様性理解の一環として認知症理解を位置付ける
  - 地域社会(チームオレンジなど)との関わりも持てるように

## ⑧ 今後のロードマップ

- 解決策①:チームオレンジ活性化へ
  - 短期:様々なアクターとコラボした活動を開催
  - 中長期:「チームオレンジ × ○○」の組み合わせを増やし繋がりを恒常化。認知症サポーター増加、認知症高齢者や男性の参加増加を目指す
- 解決策②:段階的な教育プログラム実装へ
  - 短期:市内小中学生の認知症の理解度を調査。地域差などを加味し教育プログラムの実施モデル校を選定・実施
  - 中長期:中高にも展開。坂出市ならではの段階的な認知症教育プログラムを策定、現場で実践

# 香川県土庄町

上田、田中、李、石川

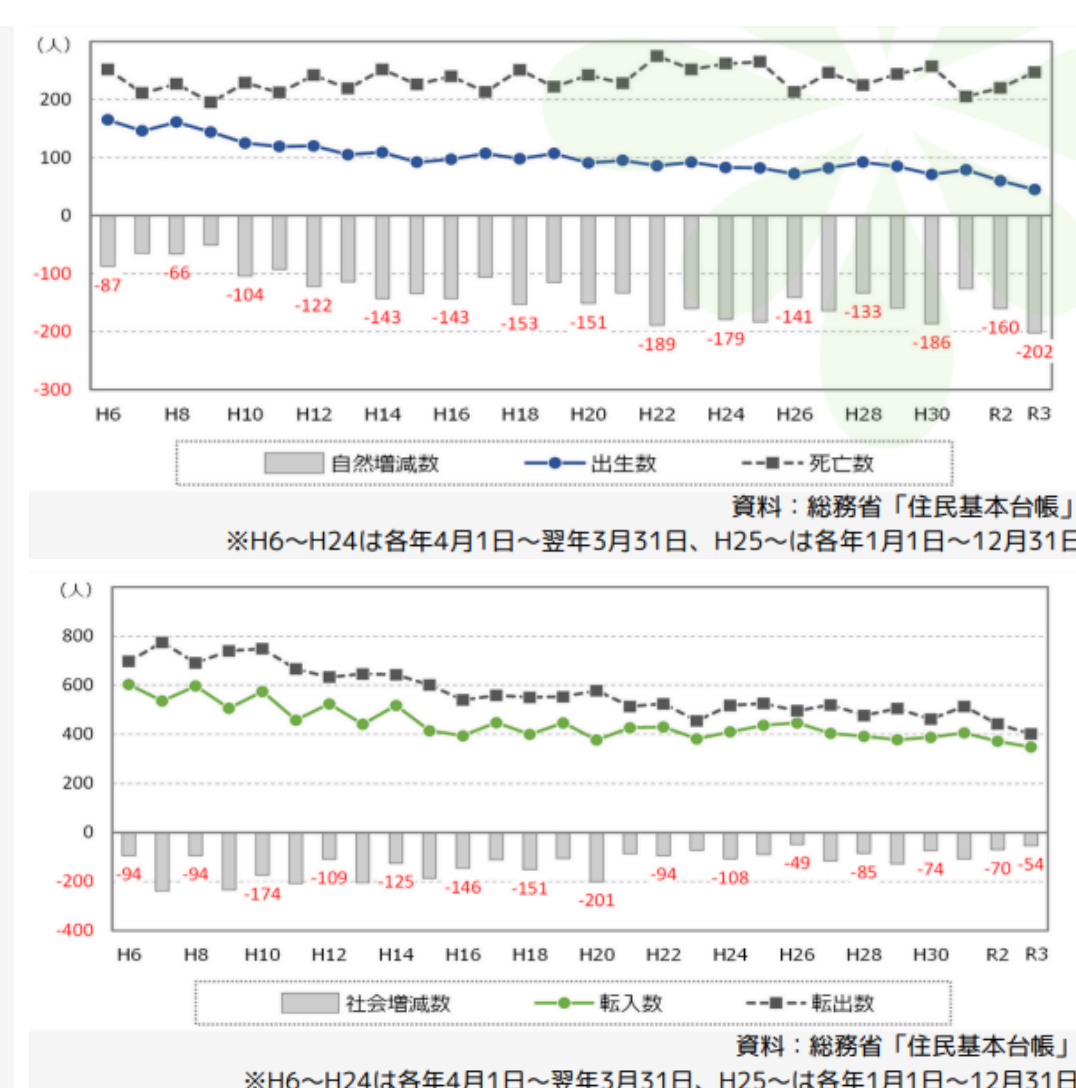
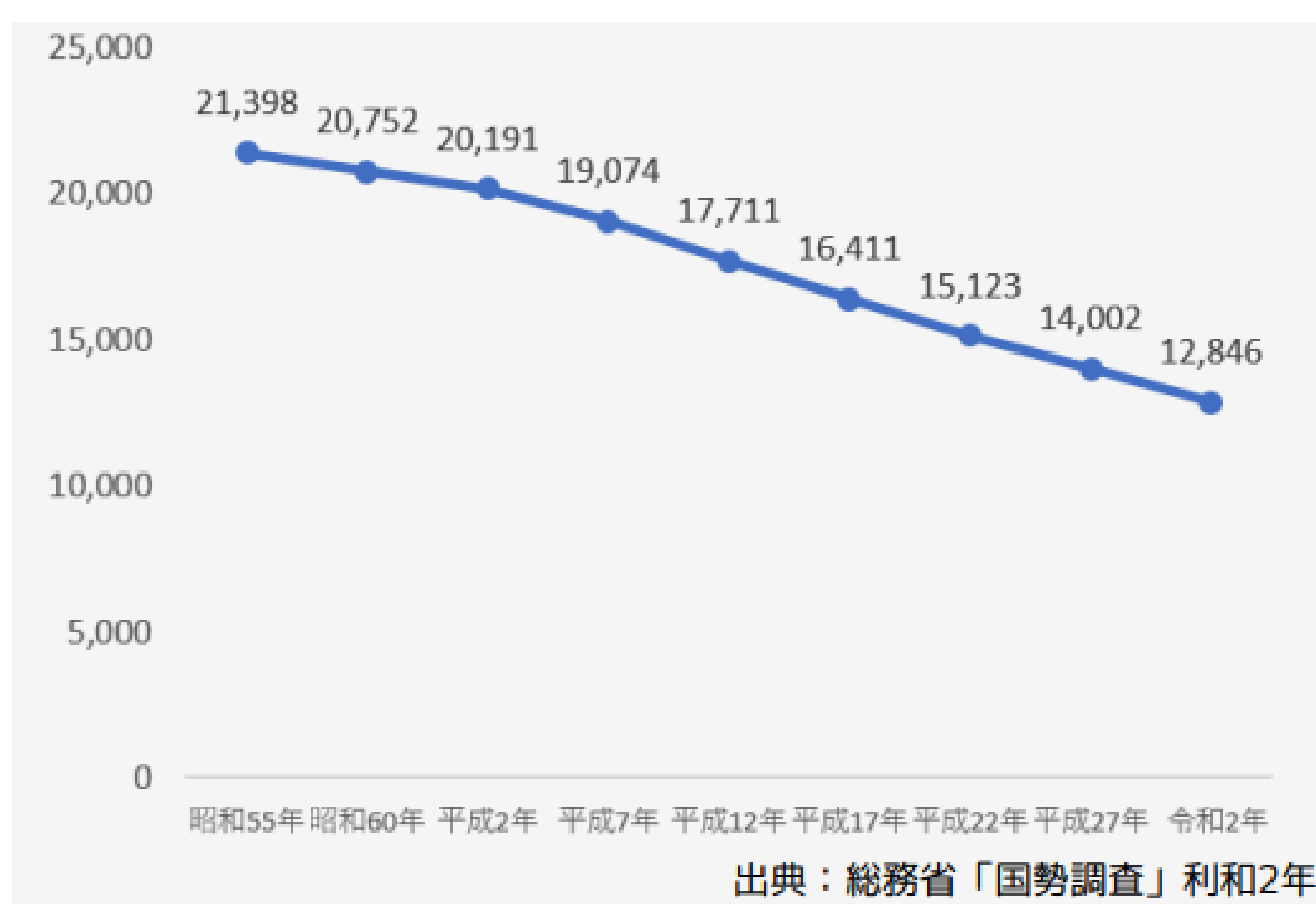


## 01.土庄町について

- ・人口12,846人
- ・面積74.38㎡

瀬戸内海に浮かぶ小豆島の北西と隣の豊島などからなる町。

オリーブ公園や映画村、近年では瀬戸内国際芸術祭の作品など、観光資源を豊富に持つ島である。瀬戸内の気候や、海の要衝となる立地から、オリーブ・醤油・ごま油・そうめんなど名産も多い。



土庄町の人口推移

## 02.地域の課題

他の日本島しょ部と同様に、小豆島では急激な人口減少や高齢化率の上昇が見られ、産業の後継問題やインフラの縮小をはじめとした様々な課題の根本的な要因となっている。

一方、社会減に関しては減少が抑えられているという強みがあり、町では観光業をきっかけとした移住の促進などに力を入れている。

### ●移住促進

多様な物産や観光資源を活かした関係人口の増加

より多くの人に・より深く小豆島のことを伝えるきっかけを作る

### ●人口流出対策

島唯一の高校で「島のインフラ」である、小豆島中央高校の魅力発信

生徒数の減少により、高校が地域から失われ、さらに島外へ若者が流出することを防ぐ

海路等の複雑な交通による  
旅行のハードルの高さ

関東圏における  
町の知名度の低さ

観光客から  
関係人口への発展

高校における多様な  
活動を外部へ発信

新たな活動の  
提案と協働

地域への  
愛着を育む



高校生が作成し、島や活動について発信するフリーペーパー「しまいろ」

### 小豆島中央高校の「しまのみらいプロジェクト」について

小豆島の活性化や地域との繋がりを育てることを目的とした、高校生が主体となり、大人や地域を巻き込みながら行う校外プログラム。小豆島の魅力を多くの人に発信しつつ、高校生も進学または就職後の進路に故郷である小豆島を選択肢として残ってもらうきっかけを作り出している。

今年度のFSでは「しまみら」の活動に参加させていただき、新たな活動の立ち上げや島の観光についてのアイデア出しなどを行ってきた。

## 03.実施した取り組み

3回にわたる「しまみら」でのワークショップの中で3つの取り組みを高校生と実行してきた。

### ①五月祭への出店

目的：島の名産の発掘

関東圏を中心とした島外への発信

高校生と「五月祭に小豆島で出店するなら？」というテーマで意見を交わした。小豆島の名産品についての理解が深まり、来年度にオリーブオイルの味比べができるガーリックトーストの出店をする準備を進めている。



島のオリーブオイルのアピール方法を考える試作会

### ②リール動画作成

目的：高校生の活動の幅の拡大

「しまみら」活動の発信方法の拡大

動画編集を教えるワークショップを開催。現地活動で集めた写真や動画を使用して、島の観光の課題を整理しながら高校生とともに考案したモデルコースを紹介するリール動画を制作し、投稿した。



動画作成WS

### ③高校生によるポッドキャスト

目的：島留学の宣伝

高校生の活動を拡大

島での学生の日常や「しまみら」の活動を高校生の声で広い地域へと届けるためのポッドキャストの立ち上げを提案。初回はフリーペーパー「しまいろ」の制作に関する話などを中心に収録を行った。



高校での収録中の様子

## 04.これからについて

2025年度ではいくつかの取り組みを高校生と行ってきた。いずれも活動としては序盤の段階で、参加した学生やワークショップの内容によって感触も様々であり、実際に高校生にどれほど定着するか、どのような展開が見られるかは未知数である。高校生が楽しいと感じてもらえた活動に関してはぜひ取り入れてもらいたいが、今回行ったものに限らず「しまみら」において高校生から何か新しい提案や活動が生まれるきっかけにもなっていればと思う。特にポッドキャストに関しては、台本の作り方やテーマのアイデア出しについて等の技術面を今後しばらくはサポートしつつも、最終的には高校生だけで行える「しまみら」の活動として確立したものになるように見届けていきたい。

# 日高村コミュニティバスを通じた「買い物難民」問題の解決案



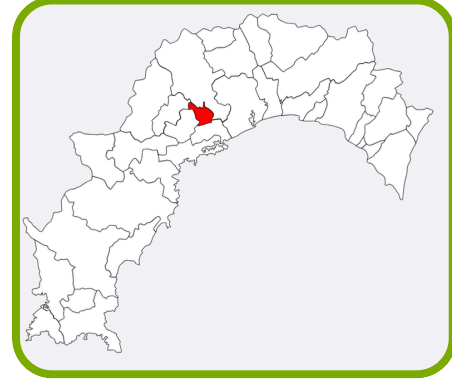
高知県日高村チーム 野々口・佐藤・田中・中村

## 1

### 現地活動・村の現状

#### 高知県日高村

人口：約4700人  
世帯数：約2400世帯



#### 第一回現地活動

- ・パーチャルスーパー
- ・移動販売
- ・コミュニティバス
- ・聞き取り調査



○買い物に対し「今は大丈夫」と、車と家族の支援という自助や共助に過度に依存  
→「もし車がなかったら？」という問いに具体的なイメージを持っていない

#### 第二回現地活動

- ・スマホ教室（バスの乗り方教室）
- ・マルシェ



○村民はコミュニティバスに対して、十分なサービスだと認識していない  
ルートや時刻、バス停の位置、予約方法など、利用者も未利用者も不満あり  
町外に買い物先が移ったことで指定ゴミ袋の調達需要が存在

#### 現地活動から見た問題点

○現状のコミュニティバス・デマンドバスは「車を手放した人」がスムーズに移行できる受け皿になれていないのではないか

## 2

### 将来像と課題

#### 将来像とのギャップ

##### 目指すべき将来像

住民が車を持たなくても、買い物に困らないような村をつくる

#### ギャップ

- ①住民がコミュニティバスの利用方法をわかっていない  
「バスが来るかわからない」「バス停の位置がわからない」など、いざ利用を検討したときに発生した疑問を抱えていた住民も
- ②村(サービス)が住民の不満に対応しきれていない  
未利用者は「バス停が遠い」など、対処が難しい意見がある

##### 現状

- ・「今は大丈夫」と車がない時の生活をイメージできていない
- ・コミュニティバス(周遊バス/デマンドバス)は住民の不満がある

#### 「買い物に困らない村」を目指す上での課題

##### 1

#### 自分ごととして考えない

コミュニティバスやデマンドバスは、買い物する上で便利なサービスである一方で、車が運転できる間はバスの使い方やその利便性を知らずとしない

##### 2

#### 必要なデータが足りない

サービス向上のため、バス停の位置やルートを改善する必要がある一方で、改善に必要な「住所」や「未利用者」のデータがない

## 3

### 解決案

#### 1

#### コミュニティバスでのゴミ袋販売

##### 目的

- ・住民にとって身近な問題である「ゴミ袋」によって、**村民の路線バスへの関心を高める。**
- ・ゴミ袋を買いにバス停まで足を運んでもらうことで、いつ、どこにバスが来るかを認知でき、**村民はいざというときにバスを使える状態になる。**



##### メリットと導入への課題

###### メリット

- ・初期費用や在庫管理費用がかからず、低コストですぐに始められる施策である
- ・住民にとっても家のすぐ近くでゴミ袋を入手できるように

###### 導入への課題

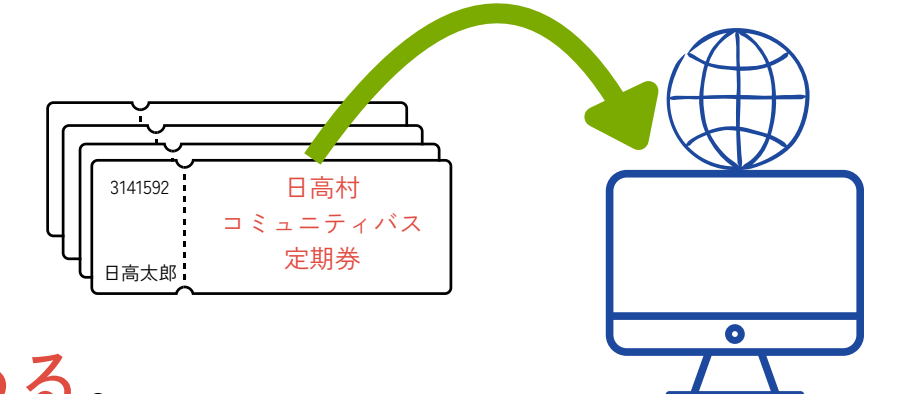
- ・ゴミ袋販売に伴う運転手の負担増加、調整の必要性
- ・路線バスの速達性、定時性が低下してしまうおそれ
- 販売の手間がかからない仕組みづくりが必要

#### 2

#### 定期券を用いたデータ管理・活用

##### 目的

- ・定期券販売時に、村民の住所や普段使うバスの情報などを収集し、**低コストでデータを集める。**
- ・村民や事業者にとって予約/対応の手間が減少する。
- より良いコミュニティバスの運行形態を実現する。



##### メリットと導入への課題

###### メリット

- ・既存の利用者だけでなく、潜在的な利用者のデータも収集
- ・定額で乗り放題にすることでさらなる利用を促進

###### 導入への課題

- ・個人情報の管理方法について検討の必要性
- ・十分に利用者が増えずデータを得られない可能性
- ・具体的な活用方法、運行制度変更の在り方が不透明
- 頻繁な制度変更は利用者の混乱を招くので、慎重な検討が必要

## 4

### 今後の展望・目標

#### 解決策の発展案

- ・バス車内でゴミ袋以外の販売を行う(貨客混載の拡大)
- ・定期券の電子化/キャッシュレス化

##### 目標

- ・定期券購入者...約200人  
(65歳以上人口の約10%/現況比8倍)
- ・バス収益率...15%(全国標準)  
(現況比7倍)



▲日野自動車「ホンチョドット」  
貨客混載を想定し、トラックとバスの中間を取った構造に。フルフラット構造なので高齢者でも乗りやすく、乗客間の交流も生まれやすい。

▲小山市「noroca」  
市内のコミュニティバス全線で使える格安定期券。電子化に際しては交通系ICカードを導入せず、単に画面を表示する形式とし、安価に実現した。

画像引用 [https://car.watch.impress.co.jp/docs/event\\_report/jm025/2019688.html](https://car.watch.impress.co.jp/docs/event_report/jm025/2019688.html)  
<https://www.city.yayoi.nagasaki.jp/e-bus/unchi/page/01656.html>

## 5

### まとめ

#### 現状

車が運転できる人々は「今は」生活に困っていないが、運転できなくなってからの生活まで考えられている住民は少ない

#### 将来像

住民が車を持たなくても、買い物に困らないような村をつくるため、公共交通で独力で買い物できる体制の整備が必要

#### ギャップと課題

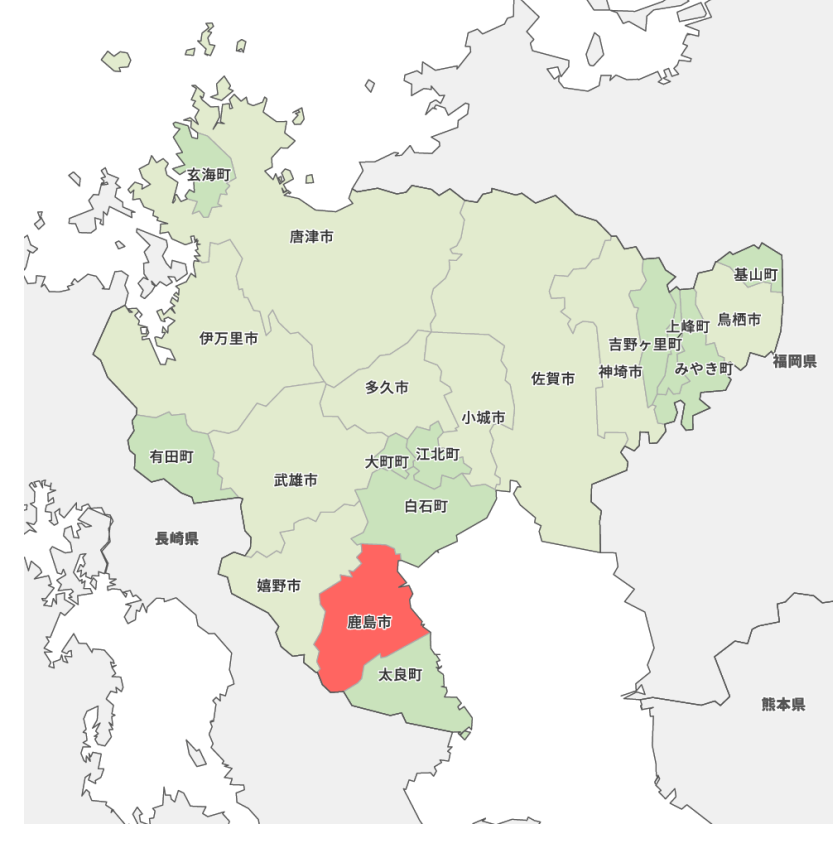
- ①住民がバスの使い方を知らない→「自分ごと」になっていない
- ②村が住民の不満に対応できていない→必要なデータが不足

#### 解決策

- ①バス停・車内での指定ゴミ袋の販売  
「自分ごと」であるゴミ袋の販売から、バスの時刻/ルートを認知
- ②定期券を用いたサービス改善体制の構築  
...定期券に住民のデータを紐づけてデータを収集し、改善に活用

## 1. 地域紹介

～東は有明海、南は多良山系に囲まれた自然豊かなまち～  
 人口：27410人（東京大学の学生数程）  
 面積：112.12km<sup>2</sup>（柏市と同程度）  
 特産品：海苔、日本酒、みかんetc



テーマ：「自発の地域づくりを加速させる」

※地域が自ら考え行動し、トライ&エラーを繰り返しながら、地域資源を磨き上げる取組  
 鹿島市にある地域資源を生かして行政に頼らずに持続可能な地域づくりを行っていくための施策やアイデアを考えました

## 2. 活動内容

・第一回現地活動（2025.8.4～7）



・活動したこと  
 -鹿島の観光地・施設巡り  
 -現地の方との交流（KATAラボ、奥さん、漁協）  
 -みんなの家でかかしづくり、懇親会  
 ・得られた学び  
 -鹿島市には多様な資源があるが、十分認知・活用されておらず、点在していることが課題  
 -一過性でない持続的な仕組みとして  
 ①移住者・関係人口の増加  
 ②6次産業化の推進  
 を2つの軸として取り組む方向性

・第二回現地活動（2025.11.1～3）



・活動したこと  
 -かかし万博まつりの準備&参加、打ち上げ  
 -現地の方との交流（奥さん、田舎商店、移住支援室、松栄丸、島崎さん）  
 ・得られた学び  
 -移住支援はすでに行政主体で進んでいる現状  
 →他地域との差別化の必要性  
 -「稼ぐ手段」「地域を知る手段」としての6次産業化に焦点を当てる方針  
 →鹿島に特徴的な資源である“みかん”の活用

- ・ホームカミングデイ（2025.10.18）：特産品を販売し、鹿島市について知ってもらう機会に。縁のある方と話が弾んだことも。
- ・鹿島市FSインスタの開設：FSチームの活動と鹿島市のイベント等をより広めるために開始。
- ・太良町への提案：鹿島市の隣の太良町を訪れ、観光推進のためのアイデアを出し合った。

## 3. 提案

### 「鹿島のみかんの木オーナー制度」 学校教育を起点とした持続可能な6次産業化

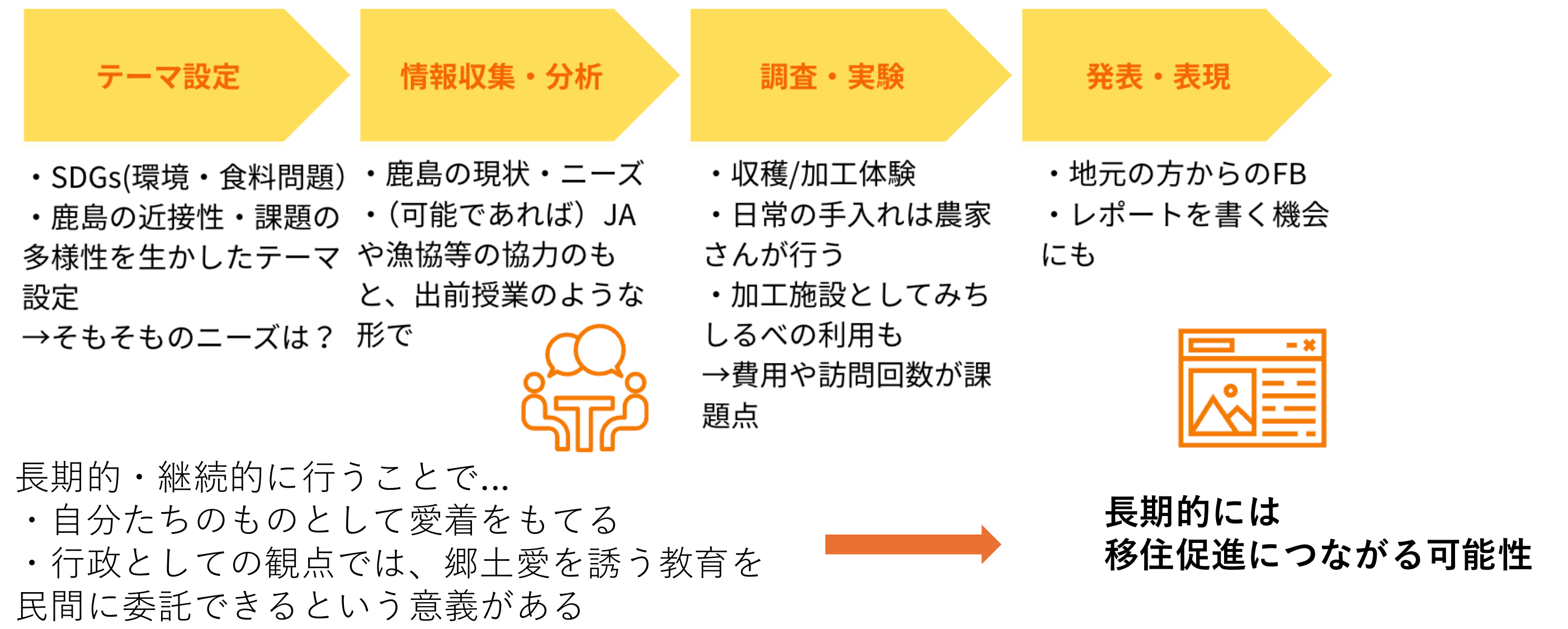
#### ・施策を選んだ理由

オーナー制度を軸に6次産業化を行うことで、郷土愛の醸成にもつながり、長期的には移住者を増やすことにもつながるのではないかと、という着想から  
 ⇨ふるさと納税・スタディーツアー（体験×学び）をオーナー制度と組み合わせる可能性を検討

#### ・リサーチ内容

- 1.みかんオーナー制度の事例調査、ふるさと納税の現状  
 -全国各地で、みかんの木オーナー制度はすでに実施されている。  
 -高額寄付×大量オーナーといったユニークな事例も存在  
 -鹿島市のふるさと納税では、海苔・佐賀牛・果物などはあるが、みかんの活用は限定的
- 2.スタディーツアー・探究学習の現状  
 -学校教育では【問いを立てる→調査・体験→発表】という探究学習が重視されている。  
 -佐賀・福岡周辺では、自然体験・歴史体験を中心としたスタディーツアーがすでに存在。  
 -鹿島市でも酒蔵ツーリズムや干潟体験などはあるが、学習テーマとして統合されたパッケージは少ない。

#### ・みかんの木オーナー制度を用いた校外学習のフローの例



## 4. 今後の展望

#### ・潜在顧客の発見

- 私立の学校法人や周辺地域の教育機関にアプローチ
- 学校のみならず他の業界・団体へのアプローチも検討の余地あり

#### ・地域間連携の構築

- 第1次産業～第3次産業まで、ヨコのつながりを創出する
- 環境問題や自然の保全にかかわる他の地域の方との連携

#### ・学習事例の作成

- 先行事例を通して、鹿島で学ぶことの意義や重要性をアピールする
- 多角的な視点からの学習事例を提供し、目的に合うプランを模索

#### ～アンケートを実施しました～

#### ①要素とプロセス

- ・スクールミッション、グラデュエーション・ポリシー、学校の方向性
- ・前例踏襲、伝統(変更には労力も必要)・学年により教員や保護者の意見
- ・予算、日数、人数的に受け入れ可能かという実施面での条件

#### ②導入可能性

- ・現時点では検討の余地あり・長崎からは厳しいといった意見も

#### ③懸念点・課題・改善点

- ・費用対効果：みかん収穫体験以外のこともしなければ厳しい。九州以外からならば体験活動の一つになりうる
- ・複数の学校や大学、地域との連携：複数の学校の同時購入で交流の機会にも。教育育成系大学や附属学校での購入。地域やJA、みかん農家との連携。
- ・目的や教育的効果：高校の体験活動としてならば、OBやNPO法人、大学教員との関わりがあると良い。みかんの木を学校として育てる目的を明確にすることが重要。

【佐賀】教育委員会・鹿島市小中学校・県立佐賀西高等学校【長崎】青雲高等学校【福岡】県立小倉高等学校・久留米附設高等学校 ご協力いただきありがとうございました

## 5. お蔵入り集

#### 6次産業化について

- ・農林水産業をつなぐ、商品化のプラットフォームの設立
  - ・農業/水産業などで発生した課題やその乗り越えた事例などを共有
  - ・ノウハウの共有や、事業者同士のマッチングの場を提供
- ・みかんの木をふるさと納税の返礼品に加える
- ・法人向けの施設の建設のみかんの木の販売
  - ・ESG投資や福利厚生の一環として
- ・農泊/滞在型の施設の建設

#### その他（移住政策）

- ・空き家バンクの拡充
  - ・肥前浜地区のみならず、其他地区への拡大
- ・みちしるべ活用リーフレット
  - ・使用事例のみならず、商品化の過程でどの機械を使用したのか個別具体的に記載
- ・鹿島市の農業補助金の存在をアピール
  - ・新規就農のしやすさを周知
  - ・就業事例の中で補助金使用例を紹介
- ・廃棄される農水産物の利用施策
  - ・みかんのジュース？
  - ・色落ち海苔をポテトチップスの中に入れる？

# 長崎県佐世保市宇久島 -宇久高校離島留学制度の改善と、高校生の将来ビジョン醸成-

笠木日向多 志岐晃誠 下條円雅 八木優磨

## 宇久島とは

- 佐世保港から西方へ約60キロ離れた五島列島最北端（上五島と呼ばれる地域）に位置する
- 平成18（2006）年に旧宇久町と旧佐世保市が合併して、佐世保市宇久町となる。
- 人口は約1700人。すでに島民の2人に1人以上（58.3%）が65歳以上の高齢者。



左：宇久観光協会HP、右：『宇久未来まちづくりプラン』から引用

## 離島留学とは？

一 島外に暮らす学生が、離島に住み込んで生活を体験しながら地域の学校に通学すること



### \* 宇久島における離島留学

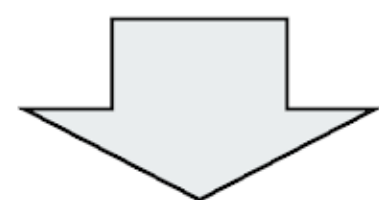
- 長崎県立宇久高校が受け入れ  
→宇久高校：2025年度生徒数13人  
廃校ライン・存続の手段としての離島留学
- 離島留学を行う主体  
→制度そのものやカリキュラム：県教育委員会  
しま親を含む受け入れ体制構築：行政
- 初年度である2026年度は  
ホームステイ（しま親）制度を利用予定

## 提案①

### 三者間の情報の非対称性の解消

県教委・宇久行政センター・離島留学関連住民の三者間での情報共有における透明性と迅速性が重要。特に離島留学制度の導入直後には、より多くの問題が顕在化する可能性がある。

- 三者間連絡協議会の設置
  - 三者が学期毎（年3回）に対面またはオンラインで集まる場を公式に開催。
- 三者間での連絡システムの導入
  - teams、Slack、LINE WORKS等のコミュニケーションツールを導入して、迅速に情報や予定の共有をできる環境を整える。



三者間の情報の非対称性が解消されることで、継続的に発生するであろう課題や改善点にも迅速に行動に移して取り組むことができる。

## 提案②

### しま親の「レスパイト（休息）」制度の導入

#### レスパイトケアとは？

育児や介護など普段誰かのケアを行なっている人が、日々の疲れや冠婚葬祭、帰省、旅行などの理由で在宅ケアが困難になる場合に、代替者がケアを担い、日頃ケアを行なっている家族などのリフレッシュや負担軽減を図る取り組み。

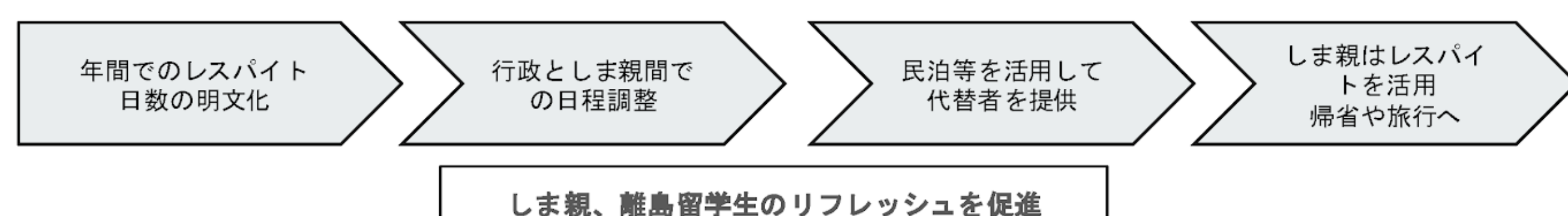
取り組み実施例：和歌山県における里親及びファミリー養育者に対するレスパイトケア

<https://www.rxf.wakayama.jp/prf/rf/110400/d00218968.html>

#### 宇久島のしま親制度の現状

家族で帰省や旅行に行く際の対応の未整備、離島留學生徒の帰省を除いて無休でのケア

#### 民泊等を活用したレスパイト制度の導入



## 提案③

### 将来的な離島留學生のための「寮」制度の構築

・多かった島の人の声「持続的な離島留学制度構築のためには、寮が必要」

・宇久島で「寮」を作るためには？

- 資金集めが必要
- 土地や建物（いわゆるハコモノ）が必要
- 運営する人員・組織が必要
- 継続的な運営のためのルール作り



五島列島・奈留島の寮「しまなび舎」  
<https://narushimana-biya.wixsite.com/my-site/about-us>

## 今年度・FS長崎県佐世保市チームの活動テーマ

- 宇久高校離島留学の改善
  - 2026年度から導入が開始予定である宇久高校の離島留学
  - 宇久島の受け入れ体制における改善
- 宇久高校の生徒の将来ビジョン醸成
  - 大学のない宇久島において、高校卒業後に島を離れることも選択肢になりうる
  - だからこそ将来のビジョンを見据えた進路選択をする助けをしたい

## 島の現状と課題

離島留学制度に対して、島民は制度の重要性を理解し、協力的！

しかし、

- 「しま親」という役割の負担が重く、引き受けることへのハードルが大きい
- しま親の制度に対して不安・不明点があるけれども、相談できる相手・場がない
- 高校（県）・小中（市）・しま親・行政の立場間で、情報共有や協力が必要だが、話し合う場がない

など、しま親の負担、制度の運用に関する問題点を共有して解決する場がなく、問題点が宙に浮いてしまっている状況

課題：離島留学制度に関わるアクターである県教委・行政・島親のコミュニケーションが取れていない

## 提案④

### しま親の送迎負担の軽減

#### 宇久島でのしま親制度の現状

高校からの距離によってはしま親による送迎がないと通学できない恐れ→子供の行動に合わせて車を出す必要があり、負担

#### 島内のバスを島内の通学にさらに活用できないか？

現状は午後のうちに予約が必要で、決まった時間に、決まったルートを守る→自由度を上げることで利用しやすくないか？

他の自治体での取り組み例：岐阜県白川町・東白川村「おでかけしらかわ」 <https://www.odেকে-shirakawa.com/>

かつては帰宅時間帯において、JRの列車が到着するタイミングで家族が迎えに来る→交通弱者の移動に制限

路線バスとタクシー事業者、住民のボランティアが協力して交通体制の確立を図る。定時バスに加えて、予約制バス、JRの列車と接続するバスを走らせる→家族の送迎が不要に

完全模倣は難しいが、バスやボランティアの方の力を借りることで、しま親の負担軽減につながる可能性は十分にある

## 提案⑤

### 給食制度の導入

#### 宇久島でのしま親制度の現状

家庭での朝食・夕食に加えて、高校ではお弁当を作る必要がある。

→学生がいない家庭にとって3食を毎日用意することは大きな負担

→既存の小学校・中学校用の給食設備を使って、高校生の給食も用意する可能性

- 小学校・中学校で現在運営されている給食設備をつかって高校生分の給食を作ることで、しま親の負担を軽減できる。
- 給食施設は市営・高校は県営のため、市と県が協力して運営を行う必要がある。

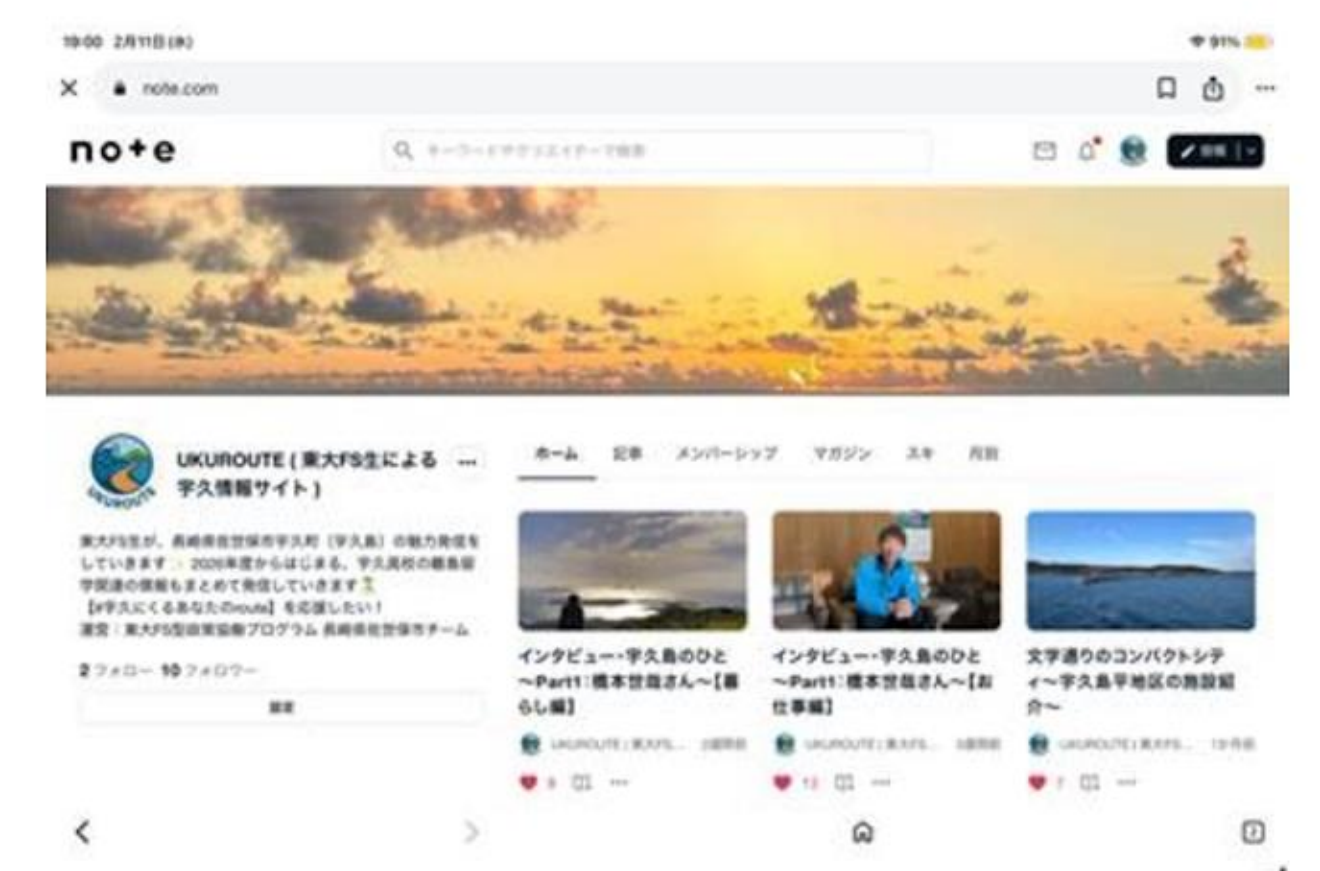
県からのしま親に対する補助金の一部を、給食費として充てても良い！との島民の声も！

## その他・今年度佐世保市チームが取り組んだ成果

・宇久高校生徒との交流会の実施



・SNS (note・Instagram) を利用した情報発信



# 長崎県五島市 @ 栴島

## ～島に残る伝統文化の担い手のあり方について～

加藤 倅太、関口 昌一郎、藤田 舞、辻 佑樹

### 0. 栴島の基本情報

- 人口は約70名（60代以上が57名）
- 昭和中期は3000人ほど
- 高齢化が顕著
- 二次離島
- 8割が山地
- 採石場がある
- 定期船
- 3本/日



### 1. 今年度の五島市の課題設定（第3期）

島に残る伝統文化の担い手の在り方について  
～栴島神社例祭を対象として～

#### 栴島神社例大祭について

- 神輿と曳船が華やかな本窯地区の例大祭
- 例年2日間開催だったが今年度は船の関係で1日に短縮

#### 本窯地区について

- 住民基本台帳上は18人在中
- 本窯出身で本窯に常駐してるのは5人
- 最年少は54歳であり高齢化が著しい

### 2. 二回の現地活動と報告会

#### 第一回現地活動

- 福江みなとまつりに参加
- 栴島で住民に聞き取り
- 郷長に祭りのスケジュールや歴史などについて話を伺う
- 玉之浦地区の神楽保存会の方々に話を伺う

#### 第二回現地活動

- 栴島神社例大祭に実際に参加
- 準備、本番、慰労会、片付けに関わった



#### 二回の現地活動を通じて学んだこと

- 外からの関わりが伝統継承の新しい形となり得る可能性を再確認
- 準備や片付けは高齢の方々のみでは困難
- 伝統を担える人の不足（曳舟歌の歌い手など）

### 4. 島民の方への提案

本窯地区の皆さんには2つの選択肢がある

- 最後の最後まで今の体制で例大祭を続ける
- 余力のあるうちに集落消滅後の神社・神事の維持体制を新たな担い手とともに整えておき、区切りの行事を以て新たな体制に移行する

#### 2の場合：

他のお祭り（蘇民祭）などを参考にしつつ、区切りのお祭りを盛大に行い、その後の維持管理を真興産業（地元の採石会社）さんなどをお願いするというのも一つの手ではないか。

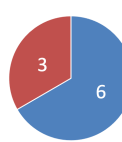
### 3. アンケート調査と結果

現地活動だけでは汲み取りきれなかった住民の意向をアンケートで調査

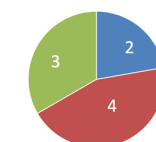
#### 結果：

- 島民の多くは祭りを続けたいと考えている
- 集落消滅後も祭りを続ける意義はあまり見出していない
- お祭りに関わる人に関しては若干閉鎖的な意向がある

祭りの形態について(人)



集落消滅後も祭りを続ける意味(人)



祭りにかかわる人について(人)



### 5. 伝統文化継承全体への示唆

#### 1. 従来の継承モデルの限界

- 出身者の帰省拠点の喪失や地元への縁の弱体化により、従来の維持体制は構造的に困難。特定企業への依存リスクも踏まえた多角的な検討が必要。

#### 2. 余力があるうちの連携強化の必要性

- 集落が消滅した後では外部協力の獲得は不可能に近い。地域に維持能力があるうちに、企業や出身者との具体的な協力体制を構築すべき。

#### 3. 継承の目的の再定義

- 存続手段を論じる前に、神事や記録など「何を最優先で残すか」について住民間で合意を形成し、目的を明確化することが不可欠。

#### 4. 適切な閉じ方という指針

- 形式的な規模維持に固執せず、核心を次代へ託すための縮小や移行は、消滅の危機に立つ地域にとって現実的な選択肢となるのではないかと。

# 「かちやあクエスト」 ～あさぎり町の地域資源を活かした体験型ツアーの構築～

熊本県あさぎり町チーム

○乙川文隆(法学部4年)、○比嘉龍聖(農学部4年)、  
塩谷稀一郎(工学系研究科修士2年)、伊関佳純(工学部2年)



人口減少

→ 移住の促進の重要性

認知度の低さ

町の魅力の認識不足

移住促進ツアーで町を知ってもらおう

町外から新たな視点で町の魅力を発掘

私たちの具体的なミッション

- ・ 現地活動を通してまだ認識されていない町の魅力を発掘する
- ・ 発見した魅力を整理、まとめ上げる
- ・ 移住促進につながるツアーを作成する

## 第一回現地活動・・・テーマ：あさぎり町を知る

- ・ 地域の方々と歓迎BBQ
- ・ 栗拾い体験・自炊体験
- ・ 天子の水公園・川辺川の訪問
- ・ 流域治水勉強会
- ・ 子どもたちとの交流 etc....



感想

- ・ 自然が豊かで、それらが生活と密接に関わっている
- ・ 人々のあたたかさ・地域の活気がある
- ・ 生活に必要なものは揃っている

↓  
子育てに向いている地域ではないか？

## 第二回現地活動・・・テーマ：子育て環境を知る

- ・ 保育園の訪問
- ・ 役場の方々と意見交換
- ・ 中学校の訪問
- ・ 小学校・高校の文化祭訪問
- ・ 雲海の見学 etc...



感想

- ・ 自然と利便性のバランスが絶妙
- ・ 多くの子どもたちが地元へ愛着を持っていた
- ・ 自然に触れる機会は十分にある
- ・ 子どもの幸福が第一に考えられている保育環境

## ツアーの基本コンセプト

### 「移住後の日常を体験する」

- ・ あさぎり町の生活を具体的にイメージできる
- ・ あさぎり町を好きになってもらう
- ・ ただの田舎移住ではなく、「あさぎり町」に行きたいと思ってもらう

### ① ツアー対象者

- ・ 九州都市部に居住する子育て世代

魅力的な子育て環境

### ② ツアーの範囲

- ・ あさぎり+人吉球磨地域全体

実際の生活域としての連続性

## ツアーの内容

- ・ 時期：学校の長期休みを想定した8月・12月
- ・ 期間：4泊5日

### 1日目：あさぎりに出会う

時間	内容
9:00	居住地出発
	自家用車/新幹線新八代駅からレンタカー/鹿児島空港からレンタカー
14:00	あさぎり町着
	町内を車で散策
	チェックイン・休憩
18:00	歓迎BBQ：移住者・地域の方も参加（子ども込み）
20:00	ヘルシーランド
21:00	自由時間

### 2日目：あさぎりを遊び尽くす

時間	内容
8:00	農体験
12:00	昼食
14:00	屋内の遊び場(かえで館、MOZOKAなど)
16:00	水遊び(天子の水公園、川辺川、水上のプールなど)
18:00	自炊 or ホストと料理
19:00	食事
21:00	自由時間



夏と冬で別のコンテンツ

### 3日目：あさぎりの日常を体感する

時間	内容
8:00	宿出発
8:30	保育園・学校の見学 *子どもでも通園制度や一時預かり制度を利用
12:00	昼食
14:00	大人は先輩移住者に現地での仕事についての相談・4日目の内容について相談
17:00	保護者が子どもを迎えに行く
	親子揃ってスーパーで買い物
18:00	自炊 or ホストと料理
19:00	食事
21:00	自由時間

### 4日目：あさぎりでの具体的なライフイメージを持つ

時間	内容
9:00	出発
	・ 住まいのについての相談
	・ 就業や事業継承についての相談
	・ 先輩移住者や地域住民(子ども含む)との交流
	*この間子どもをどこかに預けるのも可
18:00	宿着

オーダーメイドのツアー

### 5日目：あさぎりから人吉球磨に目線を広げる

時間	内容
9:00	チェックアウト
午前	お世話になった人を訪問・あいさつ回り
	・ 人吉球磨地域の散策
	・ 錦町のイオンなどの買い物拠点や3日目に回り切れなかったレクリエーション施設を訪問
13:00	
16:00	現地出発
21:00	居住地着

## お試しツアーの実施

- ・ 参加者：東京在住のSさん夫婦と4歳のお子さん
- ・ 実施時期：2026年1月22日～27日
- \*アテンドは地域おこし協力隊の方々

感想

- ・ 豊かな自然が魅力的
- ・ 人々もフレンドリー
- ・ ぜひまた来たい
- ・ 小中学校教育は少し懸念点

- ・ 自由に動ける時間
- ・ 地域についての説明がもう少し欲しい

## 今後に向けて：来年度の事業イメージ

協力隊

- ・ 実働の主体
- ・ ツアーのアテンド
- ・ 広報

卒隊者

- ・ 卒隊後のキャリア
- ・ 先輩移住者として

役場

- ・ 参加者への補助
- ・ 広報
- ・ 自治体・学校との連携

学生

- ・ ツアー改善
- ・ 広報
- ・ FSで継続参加

地域住民

- ・ アクティビティの提供
- ・ 暮らし相談

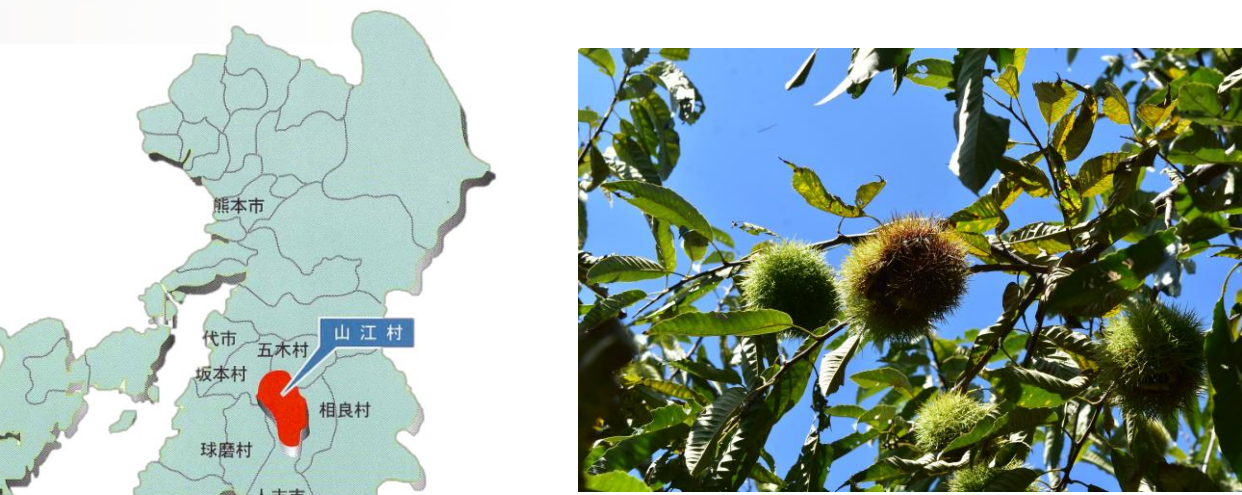


# 熊本県山江村 ～鎮山親水の担い手創出～

宮下祐真、川口珠侑、堀之内悠也

## 山江村の紹介とテーマ

基本情報



場所：熊本県南部・人吉球磨地域  
人口：3,128人(令和7年2月時点)  
地理：面積の約8割が林野  
主要産業：農業(米・栗)  
特産品：やまえ栗

テーマ

鎮山親水の理念に基づく復興へ

自然との共生意識や畏敬の念を持ち、自然と親しみと同時に怖さを知り、**自然との関わり方を見直す**概念

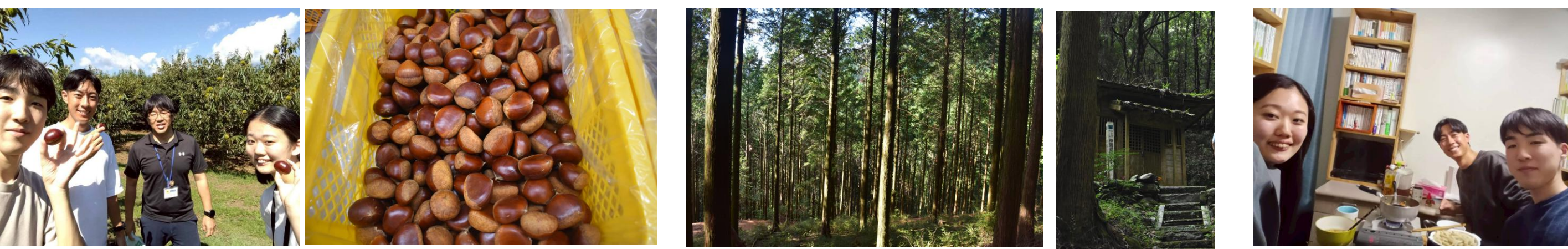
鎮山親水の理念を念頭に  
・バイオマス発電の導入についての専門的アドバイス  
・木材資源の活用についての新しい方法を提案することがFS山江村のテーマ

## 活動と提案のサマリー

活動サマリー

5月～9月現地活動① 10月～11月現地活動② 11月～2月 3月

山江村やバイオマス発電について学ぶ 現地活動で学んだことから施策を練り直す 最終報告に向けた準備 現地・学内報告会



栗畑の見学・収穫、関係者との交流 林道の見学、林業関係者との交流 うどん打ち & 提案準備

提案サマリー



## 林道アプリ

提案サマリー

山林に関わる機会が増やして、林業従事者の増加を目指す  
林業に興味を持つ人全体を増やして、林業の裾野を広げる  
→**市民参加型林道保全アプリ**の開発

林道アプリ 専門的知識や資格のない近隣住民や観光客が林道保全の一助となり、**林業への関心を高めてもらう**。

管理者(林業事業者、行政)

ユーザー(近隣住民、観光客)

管理者はマップで場所を指定し、内容と期限を付してタスクを作成する。タスク内容は林道や設備の点検など。

タスクを実行し、写真と説明文で報告する。タスク実行予定日登録しておくことも可能

タスク報告や自主投稿を確認して、修繕などが必要なものは対応する。

主なメリット

- 一部の業務をユーザーに依頼することで林業事業者、行政は業務効率化を図れる
- 特典目当てで村をたびたび訪れるリピーター創出
- 特典によって村の新しい魅力を発信
- ユーザーが自ら報告する自主投稿機能も用意し、行政への報告ツールとしても活用

トレランや森林浴などのイベントを利用してアプリの普及を進める

経営周知

行政(村)による優良事業所認定制度と支援金の仕組み



・現地活動で同った万恵林業では働きやすさ重視で満足できる給与を保障した経営で比較的若い人材を集めていた  
・給与、勤務体系、福利厚生などで一定の条件を満たした事業所を行政(山江村)が認定し、支援金を与える制度  
・農林水産省の認定農業者制度をモデルに考える  
・求職者が認定を基準に選びやすくなり、**若い人材を呼び込める**  
・支援金による優遇、若手人材の確保を目指して、**事業所が経営改善を目指す**ことが期待される

中・高等学校 林業職場体験



・**学生に林業へ好印象を持ってもらい**、林業への従事を将来の選択肢として考えてもらう狙い  
・現場での機械を使った作業の見学、体験や事業所のリソースを基に収支を考慮した作業計画を考えるワークショップなどが考えられる

## 商品開発

提案サマリー

人手不足などによる産業の衰退  
→やまえ栗を通して山江村の**知名度を向上**、雇用の創出

→施策①やまえ栗を使った**新商品栗シュークリーム**の開発 →施策②有機栽培による**やまえ栗の付加価値向上**、販路拡大

商品開発

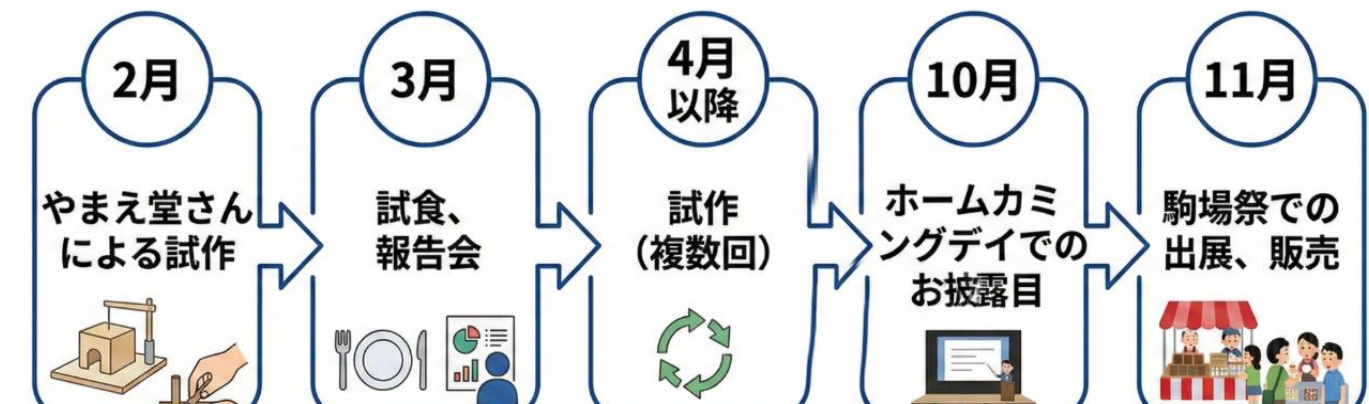
製作した栗のシュークリームを村内外で販売し、やまえ栗の知名度向上を図る。



・やまえ栗さんのラインナップをもとに、現在ネット販売での扱いがない洋菓子について提案。

・原料は栗の他小麦、卵、バターなどを中心に、冷凍販売可能なものを選択。  
・他県での事例を参考に、シュークリームを選択。(モンブランは冷凍販売、持ち帰りが難しい。)

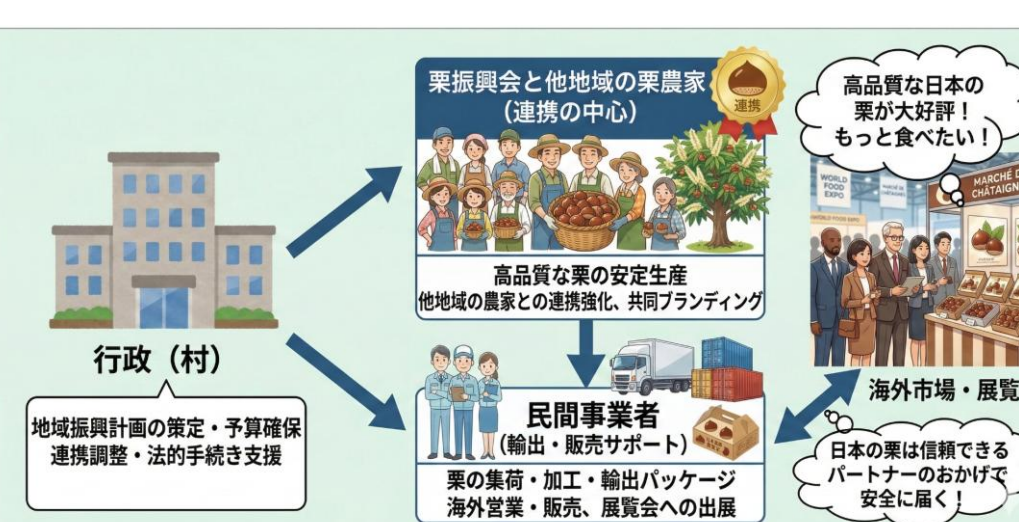
シュー皮にはクッキー生地を使用。中にカスタード・ホイップの混合クリームと、やまえ栗を使用したクリームを二層で注入。やまえ栗さんの名物栗きんとんを使用したペースト



販路拡大

有機栽培という付加価値をつけることで**海外などでの販売拡大**の見込みが高まる。

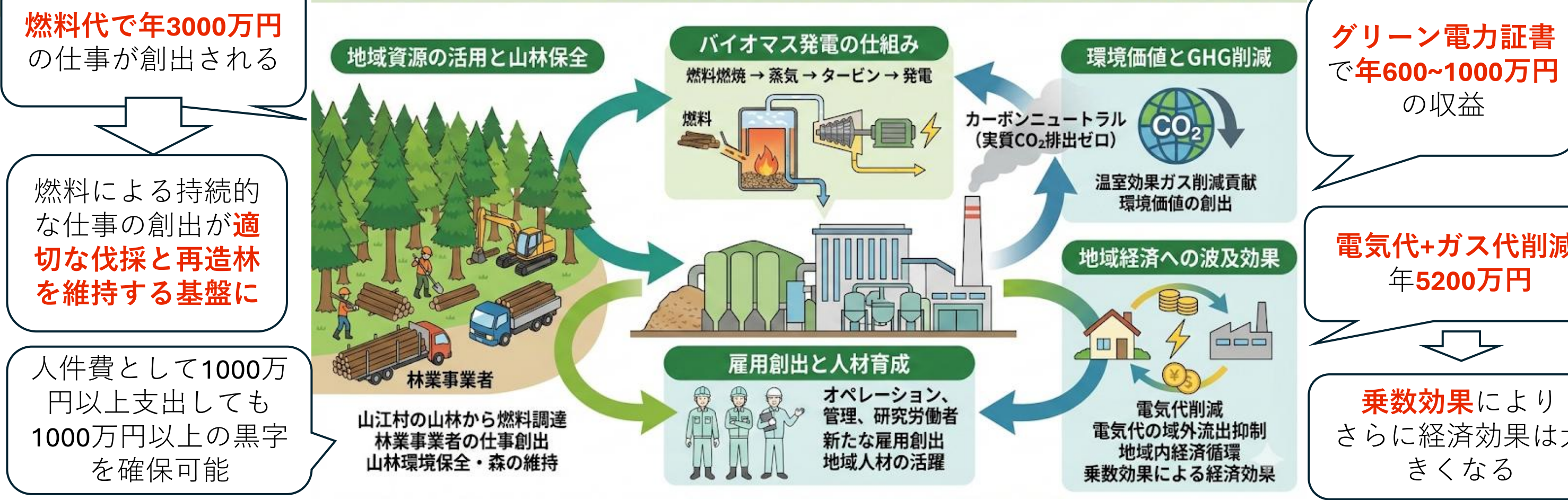
近年**有機栽培の農産物の需要は特に海外において高まっており**、中央アジアなどでは栗が多く食されているため、有機栗の需要も高いだろうと考える。  
有機栗の現在の生産量は安定的ではなく、商品としての供給の実現はまだ厳しいため、**今後の生産規模の拡大が必要**になる。



・秋田県大潟村の事例では、村主導で米加工品の輸出協議会を設立、県内他地域や佐川急便、地域商社などの民間企業と連携を図りつつ、農水省の補助の元輸出を推進している。輸出額も4500万(2021)→7500万(2022)と組織設立から着実に増加している。  
・一方で大潟村は大規模生産がもともと盛んな地域であることから生産量については課題。県内他地域を巻き込む必要性  
大潟村輸出促進協議会、大潟村事業計画

## バイオマス発電

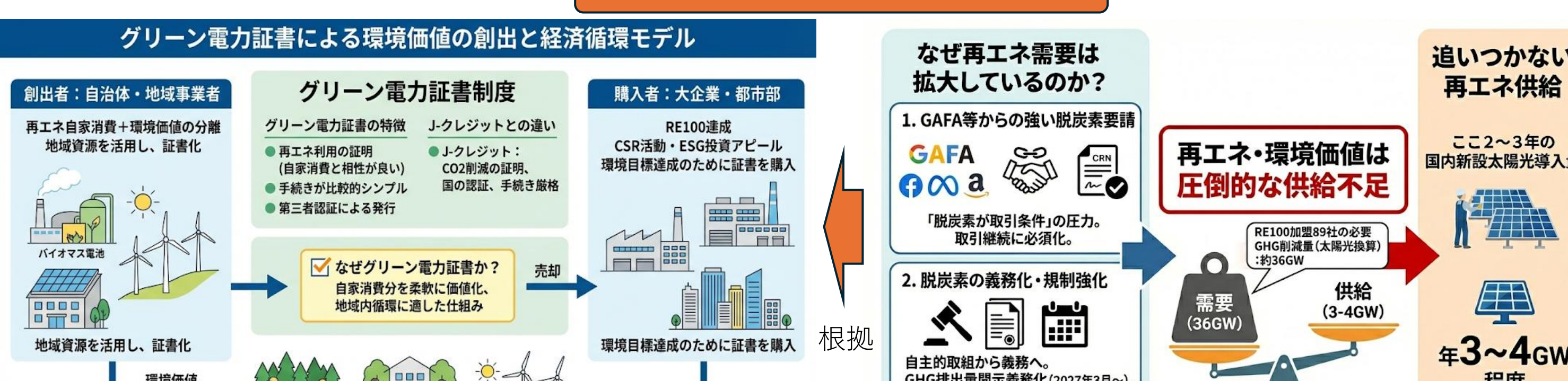
提案サマリー



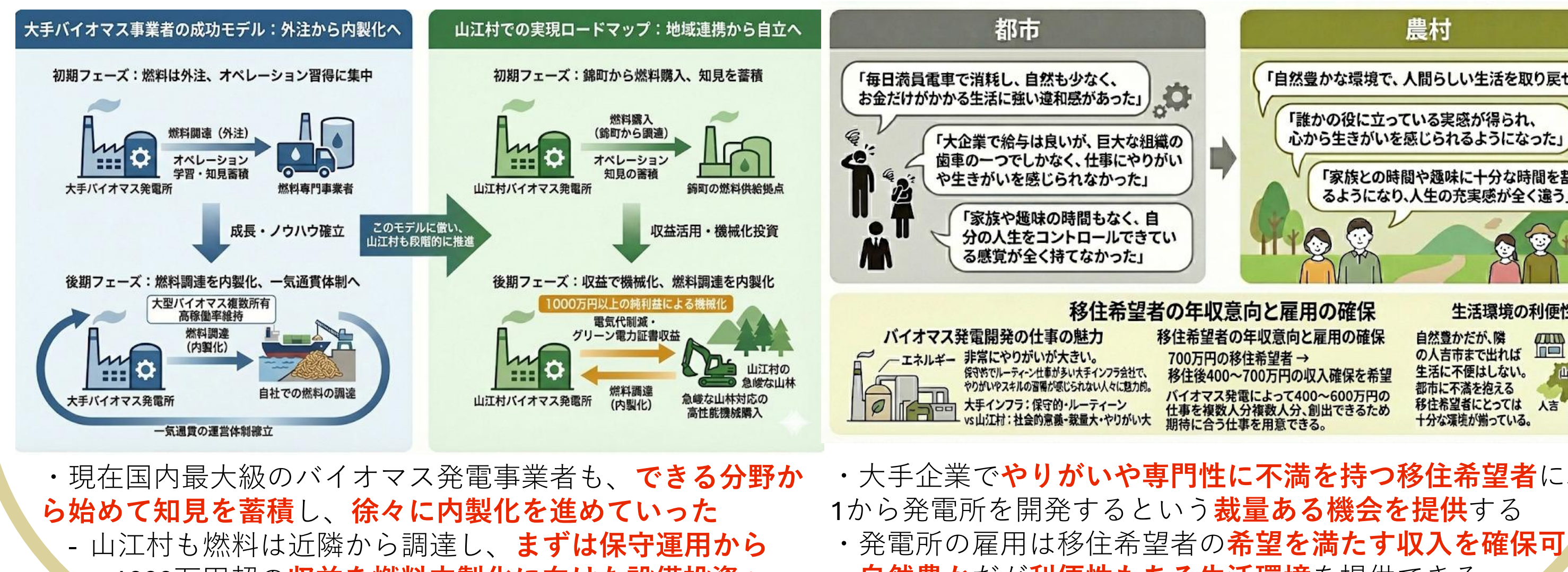
過去にバイオマス発電導入が頓挫した経緯が... 過去の障壁を聞き取り、専門家へヒアリング

項目	障壁・現状	乗り越えるべき点	提案したこと
議会の承認	以前、国からの補助金の助成が止まっていたバイオマス発電の提案が <b>議会で理不尽な理由によって否決</b>	現状の議会であれば承認される可能性が高いが、前例を覆すために <b>新規性が必須</b>	・ <b>カーボンプレジット事業も新たに実施する</b> ・ <b>年600~1000万円の収益向上にも寄与</b> ・カーボンプレジットは、GAFAs等の外資系IT企業からの強い要請やGHG排出量の開示義務化、炭素賦課金などの制度導入などにより、国内大手企業を中心に <b>需要が増加</b> ・カーボンプレジット事業は近隣の人吉市で既に実施中
採算性	・補助金が減少する中で、 <b>採算が合うか</b> ・以前から採算性は不安視されていた	採算を取れるようにするための <b>収益性向上の工夫</b> が必要	
燃料の調達	・近隣自治体の <b>錦町</b> ではバイオマス発電の燃料の <b>村内自給</b> を実現できている ・山江村は勾配が急なため、燃料のために伐採を行うには <b>機械が必須</b>	山江村で燃料を自給するためには、急峻な山林で伐採をするための <b>設備投資が必要</b>	・まずは近隣の錦町の錦町から燃料調達し、 <b>運用面などの知見を蓄積</b> ・約1000万円が見込まれる <b>収益を設備投資に回す</b> ・事例研究したバイオマス発電大手企業も、初めは自社で分業のみから実行し、残りは専門業者に委託
人手・立地	・事業を行う上での、林業事業者や設置場所を選定済み ・村内 <b>運用と燃料調達分野の人材は不在</b>	村外からバイオマス発電の <b>オペレーション</b> を担う人材を採用していただく必要がある	・ <b>都会の生活や大手企業での仕事に不満を抱える移住希望者をターゲット</b> にする ・移住者研究における先行事例では、 <b>都市生活の不満や仕事のやりがい</b> 、 <b>専門性の欠如</b> が農村移住に繋がっている

過去の課題に対する3つの提案と根拠



・**グリーン電力証書によるGHG削減分を証書化し**、炭素を進めたい企業に販売する事業を組み合わせ、**新規性を加える**  
・3円/kWhで販売する場合、**年600万円の収益を確保**可能



・現在国内最大級のバイオマス発電事業者も、**できる分野から始めて知見を蓄積し、徐々に内製化を進めていった**  
-山江村も燃料は近隣から調達し、**まずは保守運用から**  
→1000万円超の**収益を燃料内製化に向けた設備投資へ**

・大手企業で**やりがいや専門性に不満を持つ移住希望者**に、1から発電所を開発するという**裁量ある機会を提供**する  
・発電所の雇用は移住希望者の**希望を満たす収入を確保**可  
・**自然豊かだが利便性もある生活環境**を提供できる

諸塚村の特徴



諸塚村の人口推移

年	人口
1960	8,048
1970	4,582
1980	3,470
1990	2,917
2000	2,402
2010	1,882
2020	1,486
2026	1,240
2030	1,154
2040	887
2050	676



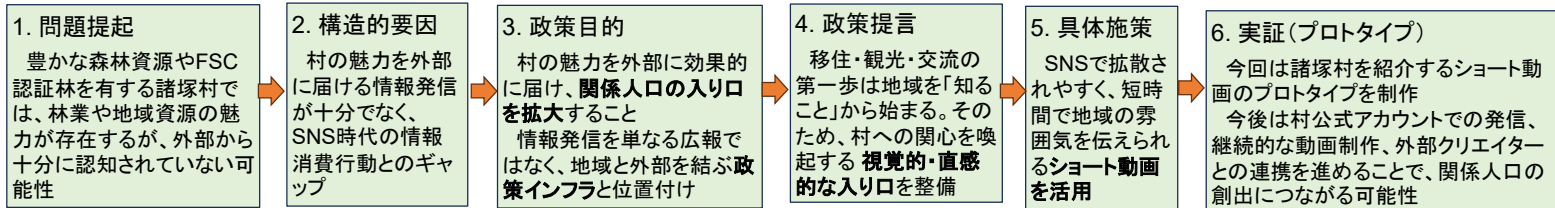
- 1. 約95%が森林で、針広樹林が入り混じる「モザイク林相」
- 2. 村全体でFSC(持続可能な森林管理を証明する国際認証)を取得
- 3. 林業、椎茸、茶、肉用繁殖牛が基幹産業

1960年代: ダム建設で人口ピーク  
 その後: 都市流出+林業縮小で人口減少が継続  
※1960 - 2020 : 宮崎県資料、2026 : 役場資料、将来人口 : e-Stat推計

問題点「若者が村に戻る動機の弱さ」

子供の状況	高校がなく、中学卒業時、ほとんどは村外に進学
親世代の意識	雇用・医療・教育の不安から子供の「都市就職」を希望
地元企業	人手不足だが、地元労働力の確保が困難
村役場	村出身者の応募が少なく、若手職員の退職も発生

諸塚村の情報発信の可能性を検証するため、ショート動画のプロトタイプを制作



地域資源の外部展開などに関する提案

FSC認証材のPR提案

村全体としてFSC認証を取得したが、林業関係者からは製材販売でのメリットは乏しいとの声がある。それでも村の木材加工センターではFSC認証材のみを受け入れている。  
 そこで販路拡大のため、林業関係者が集まるイベント「森の未来会議」でセンター長が講演し、諸塚村のFSC認証材を広く発信することを提案した。  
 なお、この件はイベント主催者である森未来の浅野社長にも申し入れた。

広域連携構想策定の提案

周辺町村との観光連携が十分とは言えないので、参考として、副知事が東三河地域に常駐し、県機関が連携して地域振興を進める愛知県の「東三河県庁」の取組を紹介し、宮崎県県北地域の広域連携構想の策定を提案した。

村の将来リスクの指摘

村歳入約53億円のうち、39億円超が国・県等からの依存財源で、村民一人当たり年間約317万円を超えており、村の財政は当面、安泰。  
 しかし、今後は急激な少子高齢化に見舞われるので、今、何らかの変化を要することを指摘した。

村報もろつか2026年3月号

東京大学フィールドスタディ(FS)生が最終報告会を行いました!



2月7日(土)から10日(火)までの4日間、FS生の3名が最後の現地調査を行いました。南川の夜神楽、諸塚中学校、ihni coffee、木材加工センターなどを訪問し、村の活性化について意見を交わしました。最終日に行われた報告会では、「より村の魅力を知ってもらうための情報発信」をテーマに掲げ、移住や観光、交流の第一歩は「村を知ること」であるとして、短期間で温度感を伝えられるSNSショート動画の宣伝効果について試作動画を交えて報告。4年生の真寿田さんは「村について事前に調べたが、実際に来て体験すると人の熱量と温かさが感じられ印象が変わった」という自身の体験談を交え、人の笑顔や生き生きと活動する表情が視聴者の共感を呼ぶと説明。学業の傍ら芸術活動も行う李さんは、自身のメディア活動から感じる「伝える」力の効果について触れ、発信することで応援者が増えていった経験について述べました。また公務員を経て再び大学院にて森林学を専攻中の伊神さんは、他県での事例をもとに県北の協力体制や森林振興のこれからのビジョンについて多角的な提言を行いました。学生たちの新鮮な視点も、村の活性化にとって大きな刺激となりました。報告会を終えた3名は「これからも諸塚村とのつながりを大切にしたい」と笑顔で離村しました。また皆さんに会えることを楽しみにしています!(企画創生課)

